
アルは今日も旅をする

建野海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルは今日も旅をする

【Zコード】

Z9695Z

【作者名】

建野海

【あらすじ】

「マスターは駄目駄目マスターですね。私がしつかりしないと」

「んな事言つなって。お前の面倒見てるの俺なんだから」

東西南を三国に囲まれ、貿易国として栄えるセントール。そこに何でも屋として滞在する旅人フィードと奴隸のアル。訪れる依頼をこなしていく中で起る、それが出来事が彼らを変えていく。

幾多の人々との出会いや別れ。依頼を経て得られる経験や成長。
ほのぼのとした日常を過ぎ」しながらも、逃れられない戦いに、やがて彼らは身を投じていくこととなる。

始まりの回想

始まりはそう、シンと静まり返つた夜の事だつた。

冷たく、人気のない地下牢に閉じ込められてもう何時間が経つたのだろう。一度も人が来ていないから、一体今が朝なのか昼なのかもわからない。

さつきからお腹は鳴り続けているけど、そんなことは今までいくらでもあつたから気にしない。そもそも、今こんな風になってしまつたのも、元を辿ればこの空腹に耐えきれなかつた自分がいけなかつたのだ。

叔母からの嫌がらせに耐えて、お腹が減るのを我慢して、露店に置いてあつた果物なんて盗らなければ、こうして惨めに奴隸になんてなる事はなかつた。

暗闇に慣れた目で左肩を見ると、そこには奴隸の証である烙印の紋章がくつきりと刻まれていた。簡易魔法で刻まれた契約の証、人以下である存在の紋章が。

罪を犯した自分を叔母は喜んで引き渡した。そして、売りに出された私はその容姿の珍しさから、あつさりと富裕層の人間に買われる事になつた。

そこまではよかつた。そう、そこまでは。

案の定というべきか、私の容姿が珍しいのを他の富裕層に自慢したかったのか、私を買った少し小太りな男は私の首に繋がれた鎖を

引いて私を引き連れ回した。周りの人々は私を見るなり、

「ほひ、これは珍しい。一体どこで手に入れたので？」

「いやいや、立派な買い物をなさりましたね。この者はおいくらでなら譲つていただけますかな？」

「あなたもまた変わった趣味をしていらっしゃる。見たところまだ十かそこらの少女ではありませんか。そのような趣味をしていらっしゃるとは知りませんでしたな」

「などと、私をじろじろと見つめ、奇異なものを見るかのように接した。その中には一つも好印象なものは見られなかつた。

私はこの姿に誇りを持っていた。死んだ母が私に残してくれたのがこの姿だつたから、たとえ人とは違つても、その事を卑下したことば一度もなかつた。

「だから、この時になつて私は自分を掲んでいる男に向かつて反抗の意思を表した体当たりをした。

しかし、結果は惨敗。男はよろめいただけで、自分に向かつて反抗的な態度を取つた私に、正確には私の烙印に命じて私を地に這いつくばらせた。

「こゝの、奴隸風情が。そんなナリでも買ってやつたというのに、この私に楯突くなんて……。せつかく話の種ができたと思ったが、こ

んな反抗的な奴隸では仕方ない。すぐにも売りに出すとしよう。
おい！ 誰かこいつを地下牢に閉じ込めておけ。明日には市の売
りに出すから傷はつけるなよー。」

そう言つて男に付き従つてゐる数名が私を捕らえて地下牢に閉じ
込めた。

そして、それから地下牢の扉が開く事はなかつた。

さつきの話を聞くと、私はまた売りに出されるらしい。またあの
壇上に上がらされて、買い手の奇異なものを見る視線に晒されるか
と思つと気が沈んで仕方がなかつた。

せめて次に買う人はもう少しともな人であつてほしい。そんな
ことを考えて身体を丸めて顔を伏せたときだつた。

「ゴゴゴ……ガタン

地下牢への扉が開く音が聞こえ、ゆらゆらと揺れる蠟燭の明かり
が部屋の奥にある階段の上に見えた。

もしかして、いつの間にか朝になつていたのだろうか？

コツ、コツと石段を歩く足音が周りに反響する。そして、しづら
くして灯りとともに現れたのは一人の若い青年だつた。彼は地下牢
に入つてゐる私を見つけると、

「あれ？ こんなところに女の子が閉じ込められてるなんて聞いてな
いぞ」

と一人呟いた。そして私の事をじっと見つめた。

「いつも他の人間と同じか。みんな私のことをじろじろモノみたいに見て、何が楽しいんだろう？」

そう思つてゐると、

「なあ、お前ここから出たいか？」

と、男が思つてもいない事を言い出した。

「べつに俺はどっちでもいいんだ。まあ、出たかつたら面倒見てやるから早く出る。出たくないならそのままここにいろ」

「一体何を言つてゐるんだり？　私はこここの男の言つてる事が理解できなかつた。」

「ここを出たとしても、どうせ殺されます。だつたら私はここに残つています。どうせ……どこに行つても同じですから」

「ふうん。だつたら、ここを出ても安全つて言つたらどうする？　お前は好きにしていいって言われたらどうする？」

「それは……」

問い合わせられて私は答えに困つた。今まで言われた事をやるだけの生活だつたから、自分でどうすればいいかだなんてことは考えた事がなかつた。

でも、ここから出て自由になつたとして一体自分はなにがしたいのだろう？　結局は変わらずに嫌な視線を向けられるのがオチだろ

う。

それならば、どこか遠く、自分が安心して過ぐせるような場所に行つてみたい。

「どこか、遠く。私がいても変に思われない場所に行つてみたい」

そう男に伝えた瞬間。目の前にあつた鉄格子の扉が強引にこじ開けられた。

「そつか。じゃあ、俺と行こうか」

男の馬鹿力に驚く間もなく、手を引かれ、勢いよく階段を駆け上る。

灯りのある場所に上ると、鉄格子をこじ開けた音が地下から上に漏れていたのか、騒ぎに気がついた人々の走り回る足音が少し遠くから聞こえた。

「マズつー！ ちょっと派手にやりすぎたなあ

マズいといいながらちつとも不安そうな表情を見せない男をどこか不思議に感じながら見上げていると、私の視線に気がついた男が

「ん？ なんだ、不安なのか。安心しきつて、俺がなんとかしてやるから」

「べ、べつに不安に思つていません。言いがかりはよしてください

私の反論が可笑しいのか、男は笑つて私の頭を軽く叩いた。明るい場所に出て私の姿ははつきり見えるようになつていてるのに男は

何も言わなかつた。

「あ、あの。なんで何も言わないんですか。その……」

灯りに照らされではつきりと見える白髪に赤眼。これこそが私が奴隸として小太りな男に買われた理由だつた。

「いや、べつに姿なんて人それぞれだろ? 多少驚いたけど、それくらいで変に思つ要素はないしな」

「そ、そりなんですか……」

今まで出会つた事のある人とはまったく違つ反応で私は困惑つてしまつ。

「ああ。そんなんで驚いてこるよつなら俺の秘密なんでもつとす」
「いぞ。聞いて驚け。実は俺はな……不老なんだ」

それを聞いて私はこの男は頭がおかしいのだと思つ事にした。勝手に出てきて勝手に助けて、私が今まで散々蔑まれて奇異の視線に晒されてきたこの姿についても何も言わないで、拳げ句の果てには自分は不老だといひ。これをおかしいと思わないでじつ思えばいいのだらひ。

「ま、普通は信じねーわな。 つと、そろそろ向こうも来るな。
俺からあんまり離れないよつとして付いてこよ」

そう言つて男は私の前に出た。私はこの時そのままここに残るという選択肢もまだ残つていたのに、気づけばいつの間にか男の背を追つっていた。

これが、私と旅人フィードの最初の出逢いだつた。

酒場にて

この世界、名の付けられていないこの世界には一つの大陸が存在する。

大陸は大きくわけて四つの国が存在し、

東の武の国 ジャン
西の剣の国 フラム
南の知の国 トリア

ジャンは武芸に優れた国。武術や氣を扱う人々、それらを学ぶ人で溢れている。

フラムは剣技に優れた国。勇猛果敢な騎士たちが今日も人々を守つている。

トリアは魔術に優れた国。魔術に関する蔵書や、魔術の最先端である学院が存在し、魔術を研究するために訪れる人々も多い。

そして、それら三国に囲まれ貿易国として栄えるのはセントール。各国の情報や特産物などが入り交じり、どの国よりも賑わい、人が行き交う国だ。

一見すると他の三国に比べて武力に劣ると思われるこの国だが、各国から亡命するものが多く、彼らが集まって作った組織があるため、簡単には侵略される心配はない。

そのためか、なんらかの理由で国を追われた亡命者が次々とこの国に流れてきたため、この国は亡益国と揶揄される事もある。

物語は、そんなセントールの西侧、剣の国フラムに近い小さな下

町から始まる。

「おーいオッサン！ なんか仕事紹介してくれ~」

下町にある酒場の扉を勢いよく開いて、一人の青年が中へと入ってきた。まだ日も昇りきっていないこの時間帯では酒場にいる人もまばらであり、彼が勢いよく登場してきても誰も大きな反応を示しはしない。

初めて彼を見た者は何事かと一瞬驚き、しかしたいした事ではないと彼の言葉と雰囲気からすぐさま察し、食べかけていたパンに再び手を伸ばす。

この酒場の馴染みの者は最近ここによく顔を出すようになった青年の毎度の行動に呆れ、ため息を吐き、そして店主に同情の眼差しを向ける。

「おい、今うちは営業中だ。仕事が欲しけりや食事の一つや二つ頼んでからにしてもらおうか」

顔全体に深く生えた髭に、強面で体格のいい、暗い路地裏で一般人が出会った日には腰を抜かしてしまいそうな風貌をした中年の男性がカウンターの中で木製のグラスを拭いていた。

「そんな堅いこと言わないで紹介してくれよ。俺を路頭に迷わすつもりかよ」

愚痴をこぼしながら、青年はカウンターの一席に座った。

「やうだぜ、レオーネ。さっさとそいつに仕事でもなんでも紹介し

てつまみ出しちまえ！ こいつ毎日毎日入り浸られたんじゃ、せつかの酒がまずくなつて仕方がねえ」

馴染みの客の一人がテーブル席から冗談混じりに文句を言つ。

「うむせえ！ おめえだつてこんな日中からろくに働きもしねえでうちに入り浸つてるじゃねえか。おめえとここつに違つてがあるならうちに金を払つてるか払つてないかの違いくらいだ」

すかさずカウンターの中からレオードが言つ返した。その言葉に他の馴染みの客は「まちがいねえ」と頷いた。
もつとも、頷いた彼らも結局のところ同類なのだとこいつ事に気がついていないのだが。

「そんじや、俺もこゝに寄付をするとしますかね。いつも仕事紹介してもらつてゐるし。オッサン、俺アップルパイとラム酒ね」

「ここのガキ。頼むと言つておいてそこはまづちで一番安い料理とドリンクじゃねーか。どうせだったらもつと高いもん頼みやがれ！」

「え～。だつてオッサンの料理つてそんな上手くないし、せつかく高い金を支払つていいもの頼んで、黒こげになつたもんを食わされちゃたまつたもんじゃないからね」

青年の一言にまたしても酒場に笑い声が響き渡る。「そりゃあそうだ」とか「おめえの負けだレオード」と言つた野次が飛び交う。

「くつ……舐わせておけば、好き放題言いやがつて。おい、フイード・俺は昔傭兵ギルドでも名の通つた腕利きの傭兵だつたんだ。あんまし馬鹿にしてると痛い目を見る事になるぞ」

「フィーダーと呼ばれた青年はレオードの脅し文句に、

「みんな聞いたか？ ついに出たぞオッサンの謳い文句、傭兵レオード。一体それで今まで何人の女を口説いて相手にされなかつた事やら」

その言葉にまたしてもドツとひときわ高い笑い声が上がつた。ある者はテープルをドンドンと勢いよく叩き、ある者は「また始まつたよ」とレオードのこつものやりとりに呆れかえる。

この酒場の店主、レオード。彼が言つには彼は昔有名な傭兵、ギルドで名のある傭兵だつたらしい。その名を聞けば、誰もが恐れかえつて彼に道を譲つたし、その任務成功率は相当な高確率だったようだ。

実際、彼の身体には剣で切り刻まれたような痕や、魔法によって傷つけられたような痕もあるので信憑性は高いのだが、なにぶんこんな下町の酒場でそんなことを言つても、相手は酔っぱらいばかり。まともに話を取り合つわけもなく、みんなほらを吹いているのか、さもなければ妄想だと切り捨てていた。

もつとも、彼自身いつからここにいるのか知つている人は少ないし、実際体格の良さから話を聞いた一部の人は実は本当じゃないのだろうかと疑つてゐる。

しかし、彼が戦つてゐる姿など誰も見た事がないので、結局冗談だとしてみんな扱つ事にしているのだった。

「お前たち……今日は閉店だ！ オメえらもこんなとひりで油売つてないでとつと仕事をでも行つてきやがれ！」

レオードは怒声とともに木樽を酒場の中央へ放り投げた。

さすがにマズいと思ったのか、怒りの矛先を自分に向けられたくないと思い、酒場にいた人々は代金だけ置いてそそくさと外へ出て行ってしまった。

ただ一人フイードを残して。

「オッサンのおかげで他の客はみんな仕事に行つたな。俺も同じように戦勤に勤しみたいんだけど?」

レオードの怒りもなんのその。気にした様子を一切見せず、フイードはいつもの調子で話を続けた。

いつものことながら、相手のペースに乗せられたことによりやく気がついたレオードは沸き上がる怒りを抑えて、しぶしぶフイードの要求を飲むことにした。

「まったく、お前が来るとうちは商売上がつたりだ。頼むから一度とこないでくれ」

「そんなこといつて、俺が来たときはみんな盛り上がりしているじゃないか」

「お前が余計な事ばかり言うからだ!」

カウンターの奥から何枚かの羊皮紙を持ってきたレオードはフイードの目の前に勢いよくそれを叩き付けた。

「ほら、お前が欲しがっている仕事だ。どれでもいいから好きなの

を選べ！ なんなら全部やつてもいいんだぞ

「いや、そこまで欲しいと思つていないから。どれどれ……」

田の前に置かれた羊皮紙に書かれた内容をフイードはじつと見つめた。そこには下町に関する事件や人手の足りない作業の手伝いに関する内容が書かれていた。

「なになに？ 中階層の建築の手伝い。土木作業じゃねえか、これ。嫌だよ、あんな男臭い」とこりにいくなんて」

「仕事を紹介してもらつてる立場で文句を言つんじゃねえ。だいたいお前なんでこんな風に仕事紹介してもらつなんていふ形式をとつてるんだ？ そりにいけば仕事なんて溢れるほどあるだらうが」

「うへん。べつにそりしてもいいんだけど、なるべくみんなの手に負えなくて困つてそうな仕事をこなしたいし。せつかく自分にできる事があるならできるやつがそれをやるべきだとは思わない？」

「まあ、そりゃあそうだけどな」

確かにフイードの言つた通り、できるやつがやれることをするべきだという考えはレオードにもある。しかし、比較的身分への差別が少ないこのセントールでもやはり格差が存在し、中階層、上階層の人間に比べれば下町の人々は魔術師や傭兵などといったものに依頼を頼む余裕がない。そのため、何か事件が起こったとしても自衛が基本になつてしまつ。

もつとも、どうしても手に負えないような事件が起これば騎士団や魔術師団に依頼を出すのだが、彼らも下町の人々だけしか被害が

出ていなこつちは中々動こつとはしないのだ。中階層、上階層に被害が出てようやく動き出すといった感じである。

だからこゝで、今ではすっかりこの下町に馴染んだフイードたちが、初めて下町で起こった事件を手伝い解決し、何も金銭などを要求しなかつた際、この町の誰もが彼を疑つた。元よりよそ者、しかも亡益国と揶揄されるこの国に腕の立つものが現れたら警戒しない方がおかしい。せつと彼らもどつかの国で何か事件を起こし、亡命してきたのだろうと誰もが思つたのだ。

「ん？ どうしたの、そんなにじつと俺の事見て」

見たところまだ二十にもなつてこなさそうな容貌をしているのに、どこか激戦をぐぐり抜けてきたような貴禄も感じる。本人は何も言わないが、やはり訳ありなのだろうとレオードは勝手に考える。

「いや、特に何もない。いいからお前はわざと仕事を選んで出て行きやがれ」

ぶつきあひまづて言つが、フイードを無理やり追いでいるのもなく、こうしてわざわざ仕事を紹介しているのは、レオードが彼を信頼してこむからだらう。

「それじゃあ、こいつを貰つてくれよ。任務成功したら報酬を町長から貰つておいてくれよ。それじゃあ、またな」

「一度と来るな、このくせつたれが

ひらひらと羊皮紙をはためかせ、フイードは酒場を後にした。そんな彼の背を見送りながらレオードは残つた羊皮紙を片付ける。そ

して、それらに一通り目を通したところで気がついた。

（つたく、あの野郎。なんだかんだ言って一番面倒な仕事を持つて行つたじゃねえか。本当に素直じやないやつだ）

数枚あつた仕事の依頼でフィードが持つて行つたのは今下町を一番騒がせている事件、盗賊による被害防止の依頼だった。

情けない主

酒場を出たフィードは羊皮紙を上着のポケットに仕舞い、下町をぐるりと周り始めた。

先ほど見た羊皮紙にはここ数日下町を騒がせている盗賊による金品の盗難被害について書かれていた。娯楽や刺激の少ない下町では、ちょっとした事件でさえすぐに噂になる。盗賊が現れ、しかもその事件が連續で何件も起こったとなれば、下町にいる人間の誰もが今ではこの事件について知っていた。

自分が被害に遭わなければ他人のちょっとした不幸なんてものは他の者にとっては話の種にしかならない。そのはずだつたが、それも昨日の事件によつて少々事情が変わつた。

昨晩下町の外れにある民家に盗賊が侵入し、侵入した民家の家主が後ろから切られて殺されたのだ。これまで家主のいない時間帯を狙つて金品を奪つていた盗賊だつたが、ここに来てボロが出た。

そもそも、野盗のような盗賊ならまだしも、自警団や騎士団がいる都市部で盗賊など滅多に見かけないはずなのだ。地形に詳しくなければ、すぐに足がつくし、下町などの金品を奪つたところでその金額などたかが知れている。しかも殺人を犯してしまつてはいよいよ追いつめられてしまつたといえるだろつ。これ以上被害が広がるようなら、さすがに騎士団といえど動かざるを得ないだろう。

しかし、騎士団を動かすとなると、それこそ隊によつては法外な金額の謝礼を請求される事もあるため、そうなる前に事件を解決しようとフィードは依頼を受けたという事である。

事件のせいか、普段に比べて露店もなく、人通りもまばらだ。大人はもとより、子供の姿など見つける方が難しい。

「困ったな。事件について話を色々聞いたかったんだけど、こうも人がいないんじゃどうしようもできないな」

先ほどの酒場に集まっている人に話を聞いておけばよかつたと今更後悔するフイード。とはいっても、彼らを追い出したのは彼自身なので自業自得なのだが……。

と、きょろきょろと辺りを見回していると、ドンと軽い衝撃がフイードの腰元に響いた。

「お？」

よく見ると小さな子供が勢いよく走り抜けた際にフイードにぶつかつたようだ。普通の人ならばそのように見えただろう。しかし……。

「ほー。俺から金を盗むとはい一度胸をしてるじゃねーか」

いつの間にか腰に付けていた硬貨袋がなくなっている事に気がついたフイードは、走り去る少年の背を見つめながら呟く。その表情にいつものような笑顔はなく、どこまでも冷めきった表情が浮かんでおり、彼の横をすれ違う者は道をあけるほど不気味さだった。

「世の中を舐めてると痛い目を見るつてことを俺が教えてやるとするか」

そうしてフイードは少年の背を勢いよく追いかけ始めた。

日が沈み始め、外に出ていた露店が店じまいを始めた頃、路地裏の一角で木箱に腰を預けて息を切らしていた一人の青年がいた。

「く、くそ。あの糞ガキ共。手加減してやつていれば調子に乗りやがつて……」

空を仰ぎ、息を整えながら負け惜しみの言葉を吐き出すフイード。そう、結果だけ言つてしまえば彼は結局金を盗まれたままだった。

あの後、金を奪った少年を追いかけたフイードは行く先々で少年の仲間と思われる別の少年少女たちの妨害工作にあつた。時には積み重なつた木箱を倒され道を塞いだり、糞の入つた小樽を投げつけたり、妨害工作に失敗して怪我をしたと思った少女に慌てて声をかけたらナイフで胸元を狙われたりした。最後は正直胸元を擦つて危なかつたが、それ以外はどうにか切り抜けっていた。

しかし、途中で少年少女が多数入り混じつたせいか、誰が硬貨袋を持つているのかがわからなくなつてしまい、結局取り逃がす事になつてしまつた。

「しまつたな……ガキだと思って油断しすぎた。こんなことがアルに知れたらまた文句を言われるに違いない」

名田上は自分の奴隸である白髪の少女のことを思い出し、フイードの気分は一気に下降した。ただでさえ毎日小言を言われてうんざりしているのに今回の件がしたら余計に小言が酷くなるということが容易に想像できたからだった。

仕方なくもう一度少年たちを捜しに行こうと木箱から腰を上げ、前を見たところでフィードはようやく気がついた。自分の前方にフードをかぶった見慣れた少女がいるところに。

人目を引く赤色の眼にフードに隠れきれていない部分からはみ出す白髪。アルビノと呼ばれる種の少女がそこには立っていた。

「さて、さつきからぶつぶつと独り言を呟くマスターに私はどう反応したらいいかわからなかつたので、じうじくすつと待たせてもらいましたが、私に知られるとマズい話でもあるんですか？」マスター

一

突然の少女の登場に動揺を隠せないフィード。少女のこめかみにはつつすらと筋が張つている。

「よ、ようアル。こんなところで会うなんて奇遇だな

「奇遇なんて白々しいですよマスター。私に食材の買い出しを頼んだのマスターじゃないですか。酒場に行つていて聞いていたので行つてみればレオードさんにマスターはとっくに出て行つたと言われましたし、荷物を置いて探しに出てみればこんなところで倒れ込んでますし。それにまた、私に知られたらいけないような事を起こしてゐみたいですし。一体今度はなにをやらかしたんですか」

「今度はつて……毎回何か起こしているようこううんじゃねーよ

「マスターが動いて何もなかつた事の方が少ないですからしあがないじゃないですか。私のときだつて……」

「やつ言われてもな…… 実際降り掛かる火の粉を払つてゐるだけだし」

「やつこつ」としてゐるから厄介」とに巻き込まれるんですよ」

ため息を吐き、アルはフイードの傍に近づいた。そして、

「それで、結局今回は何をしたんですか。マスターが色々な面で駄目な人だと云つた事は今まで一緒に行動してきてもうわかつていますから、早く云つた方がマスターのためですよ」

身を乗り出し、問いつめるアルにフイードはどうとう根負けして、

「いや、実はな……」

と先ほど起こつた事を説明しました。

「ハア。もうホントに私のマスターはどうしようもないです。本当に駄目駄目です。何でこんなのが私のマスターなんでしょう。いつその事がマスターになりたいくらいです」

アルと合流したフイードは下宿先である宿に帰り、一階の食事場で夕食をとつていた。

「まあ、まあ。アルちゃんもその辺にしておきなよ。フイードさんだつて悪氣があつてお金を奪われたわけじゃないんだから」

温かな湯気の立つ野菜スープを運びながら、中年の女性がアルに口を挟む。

「それは当たり前ですグリンさん。悪気があってお金を探られるなんてことがあつたら最悪です」

グリンと呼ばれた中年の女性は、そんなアルに苦笑しながらフイードヒアルの前にスープを置いた。

「でもアルちゃんはフイードさんに養つてもらつているんだりう？
だつたら文句を言つちゃ行けないよ。こうこつた時に助け合つた
が家族つてもんじやないのかい？」

グリンは背中まである長いくせ毛をなびかせて言つ。アルもグリ
ンの言つていることは内心理解しているからか、つい口ごもつてしまつた。

「……」今まで来てようやくそれまで黙つていた話の当事者が話し
だした。

「本当に悪かつたな、アル。それとグリンさんもなんだかすいませ
ん。気を使わせたみたいで」

「いいんだよ。あんたが悪い奴じゃないことは今までの下町で
の活躍を見ればわかるからね。それにアルちゃんのことも。あた
しは奴隸にこれだけコケにされる主人つてのも見たことなかつたし
ね」

グリンのその言葉にフイードは苦笑いを浮かべるしかなかつた。

「それで、お金の事はどうかく、今回の依頼つて言つのせやつぱり
あれかい？」

「フィードが酒場を通じて下町のやっかいな依頼を受けている事を知っているグリンは気になっていたことを尋ねた。

「ええ。おそらくグリンさんの想像している通りです。盗賊の被害の防止、もしくは盗賊の捕縛ですよ」

「やっぱりそうなんだねー。ここ最近この辺りもその件で騒がしくなつていたし、昨日なんて死人が出たらしいからね。そろそろ依頼が出る頃だろうと思つたよ。うちの騎士団は下町の為になんて動いちゃくれないし。ここがフランだつたら話は違つたんだろうけどね」

「フランという名前を聞いて一瞬フィードの表情に影が差した。しかし、それに一人が気がつく前にいつもの表情に戻つたため、誰もフィードの変化に気づく事はなかつた。

「そうですね。フランなら騎士団は身分など関係なく誰にでも救いの手を差し伸べますからね。一番治安がいい国も実際あそこですしひ

「そうみたいだねえ。特にここ最近出てきた何番隊だつたかの副隊長さん。たしかリオーネとかいつたかしら。女性なのに他の隊の隊長と変わらないくらい強いみたいだね。

しかも、あたしたちみたいな下町の人にも救いの手を何度も差し伸べてくれているみたいだし。本当にあんな人がうちの国にもいてくれたらしいんだけどね」

「そうですね。まあ、彼女みたいな人の代わりにならないかもしないですけれど、俺も頑張らせてもらいますよ

「せいぜい稼いできてもうつよ。お金をなくしたからって家賃を見逃すほどあたしは甘くないよ」

「依頼を早いところなないとな」と氣を落とすフィード。アルはその横でのんびりと野菜スープを口にしていた。

一日の始まり

翌日、こつものよつてベッドの上で田が覚めたフィードは違和感を感じていた。そして、その理由はすぐにわかった。

「おー、アル。お前俺のベッドに入るなって何度も言つてゐだらうが」

上半身を起き上がりせたフィードのすぐ横には、寒さに身体を震わせてベッドの上で丸まつているアルの姿があった。

「マスター、寒いです。早く毛布をかけてください」

「//リも身体を動かすことなく、アルは言つ。

「あんなあ、わざわざお前のためにもう一つベッドを用意してあるのになんで毎回毎回俺の方のベッドに入つてくれるんだよ」

何度言つても自分の言つことを聞かないアルに呆れながらフィードはベッドから降り、グリンによつて洗われて綺麗になつた赤色の上着を羽織る。その際、アルの身体に毛布を覆い被せて寒くないようになした。

「それじゃあ、俺は今日も盜賊の方の事件を調べて来るから、お前は大人しくグリンさんの言つ事を聞いておけよ」

それだけを言い残してフィードは部屋を出て行つた。

バタンと扉の閉まる音が聞こえ、しばらくしてアルは毛布を身体

から剥がして起き上がった。元々アルにとつてフイードと共にいる事自体に意味があるのであって、フイードがいなくなってしまってはベッドにいる意味もないのだ。

フイードとアルの関係は少々、といつよりかなり特殊だ。

一般的には奴隸と主人という関係なのだが、実際に彼らが話している姿を見て、すぐにそうだと気がつく人は少ない。

そもそも、奴隸というのは主人に思考、言動、最終的には命までも握られている状態である。奴隸の主人は彼らの命を金で買つているのだ。主人が気に入らないと判断して、奴隸の身体に刻まれている烙印に命じれば、その命を絶つことなんてことは訛もない。

そのため、一般的な奴隸は主人の顔色を伺い、媚びへつらつてい る者が多い。もちろん例外はあるが、アルとフイードはの中でもまた例外中の例外だろう。昨日の一件でもそうだが、奴隸が主人を罵倒するなど特殊な趣味があるもの以外では普通あり得ないからだ。

かといって、アルがフイードに対しても頗るそのような態度であるかというとそうでもない。普段はフイードがアルに対してふざけた態度を取っているため、アルの態度も必然冷たいものになるのだが、荒事などの際はフイードは普段から想像もできな程真面目な態度をとるようになる。そのときはアルもふざけた態度を取る事もなく、いつもとは違った対応を見せるのだ。

しかし、そんな事態はそこまで多くないので、結局冷たい態度でフイードに接する事が多くなってしまうアルであった。

（全く、私があなたの傍にいないと眠れない理由をもう少し考えてくれてもいいと思うんですが。いえ、これは私のわがままですね。

奴隸の身分で十分な衣食住を提供してもらひて、その上言論の自由まで。

……思えばマスターに何かを強要されたり抑圧されたことなんて今まで一度もありませんでしたね。本人も便宜上奴隸という立場になつてしまつて言つてましたし）

かつてフイードに奴隸という立場から解放され、その後自ら望んで彼の旅に同行するようになつてはや数ヶ月が経つた。

普段からキツい物言いをし、冷たい態度を貫き、外敵から身を守つてゐるがその実信頼できる相手がいないからそのような態度になつてしまつてゐることをアルは自覚していた。だからこそ、今アルが一番信頼できる自分の主、フイードの傍と一緒にいるときは離れないようにしてゐるのだ。

また、無自覚、自覚があるかどうかは別として、アルは常にフイードの姿を目で追つてゐる。もつともアルのその行動にフイードが気がついてゐるかどうかはわからないが。

アルもまた羽毛でできた温かな上着を羽織ると、部屋の換気をするために窓を開け放つ。部屋の床に溜まつたホコリがふわりと宙に舞い上がり、外の新鮮な空気と入れ替わつていく。

アルは急に舞い上がつたホコリにコンと少し咳き込み、口元を押さえながら部屋を出た。

（しばらくは窓を開けて換気をしておきましたよ。だいぶ中の空気が淀んでいましたから）

そうしてアルは宿の一階に存在する自分たちの部屋を後にして一階の食事場に降りて行つた。

「おや、アルちゃん。今日は少し遅めの起床だね。フイードさんはもう出かけちまつたよ」

宿に泊まっている他のお客様が食べた食事を片付けながら、グリンが明るい笑顔とともにアルに声をかけた。

「おはようございます、グリンさん。マスターが出かけた事なら知っています。今日も……置いて行かれたので」

しょんぼりと肩を落としながらアルは答える。その言葉はアルの奇抜な容姿と、親に見放されて落ち込む子供のような姿とのギャップからグリンやその場にいた者の母性本能を激しくくすぐった。

「もう、あたしがこの子の親なら絶対に置いて行つたりなんてしないのにね！ フィードさんも色々と考えてアルちゃんをここに置いて行つているんだろうけど、まったくこれじゃあこの子がかわいそうだよ。安心おし、今日フィードさんが帰ってきたらあたしが一言言つておいてあげるから」

そうだ、そうだ！ と周囲にいる宿泊客も同意の声を上げる。もつとも彼らの中でフィードの顔を知っている者はほとんどいないし、アルが奴隸だと知っているものもグリン以外にはいない。変わった容姿をした異国人とその保護者である旅人とぐらいの知識しかないのだ。

そのせいか、フィードによく宿に置き去りにされ、グリンの仕事の手伝いをしていたアルはその容姿とフィード以外には余り話さない事から自然と寡黙で変わった容姿の可愛らしい少女と周りの人間から評価をくだされていたのだ。

そして、一度決まった評価というのは中々変わるものではなく、

宿に長い間滞在しているという事もあって、宿に泊まりにきた客や食事を取りにきた客からアルは新しく入った住み込みの可愛らしい少女と認識され、いつの間にかこの宿の看板娘としての地位を確立しつつあったのだった。

「グリンさん、どうもありがとうございます。それで今日は何を手伝えばいいんですか？」

ペコリと腰を曲げてグリンにお礼を言つアル。この宿に滞在して、もうそれなりに月日が経とうとしている。その際、フィードに置いて行かれる事の方が多かったアルは自主的にグリンの手伝いをし始めたのだった。

最初はお客様にそんな事はさせられないと断つっていたグリンだったが、フィードもアルのやる事がないとわかつていたため、料理などを覚えさせるという理由でグリンにアルの手伝いを認めてほしいと頼んだのだ。

結局、一人のお願いに根負けしたのか、グリンはアルの手伝いを認める事にしたのだった。

「そうだね。ひとまず料理の材料が朝に使って少し足りなくなってきたから買い出しに行つてもらえるかい？ その後の指示は帰つてからまたするから」

「わかりました。それでは買い物に行つてきます」

カウンターの隅に置いてあるメモが書かれた用紙をグリンはアルに手渡すと、そのまま他のお客様の料理を作りに厨房へと引っ込んでしまった。

アルは受け取った紙に書かれた内容をじっくりと見て、それを片手で握りしめたまま上着についているフードを深くかぶる。

（必要なのは鳥の胸肉とあとは玉葱、それからジャガイモですね。
これなら一度の買い出しで済みそうです）

アルは必要な食材を記憶し、メモを空いているポケットに入れ、
カウンターの中に入り、置いてあつた買い出し用の硬貨袋を持ち、
宿を出ていったのだった。

買い出し

外に出るといつもより遅い時間に起きたせいか、多くの人が道を行き交っていた。露店に商品を並べ、商品を売り込むために声を張り上げる店員や、子馬に荷物を引かせる郵送屋、それらを眺めながら何を買おうかと悩んでいる一般人。多種多様な人々がいた。

日中という事もあってアルがフードをかぶっていても特に誰も不審に思う事はなかった。これが小汚い上着であれば物乞いなどと勘違いして怪しまれたかもしぬないが、フードに買ってもらつた綺麗な上着で特に汚す事もなく大切に扱つていたので新品と遜色ないほど綺麗さを保つていた。

もちろん、それだけが不審に思われない理由ではない。最近センターには厳しい日射しが照りつけており、一足早い夏季が訪れているのではないかと人々の間で噂になつていて。そのため、アル以外にも上着に付けられているフードをかぶる人や、藁で編まれた帽子をかぶる人、他にも日陰で休む人の姿も数多く見受けられる。これが実質アルが疑われない理由の大半だろう。

大勢の人波をかき分けながらアルはいつもグリンが肉を仕入れている精肉店へと歩いて行つた。

「あ、あの。鳥の胸肉を……くれませんか」

精肉店についたアルはいつものフイードに話しかけているような毅然とした態度ではなく、下手をすれば町の雑多が鳴らす音にかき消されてしまつほど小さく細い声で店主に話しかけた。

「ん？ なんだい嬢ちゃん。買い物か？ 鳥の胸肉が欲しいのか、いくつだい？」

店主はアルに向かつてできるだけ優しく声をかけた。少年少女のお使いに慣れているのか、どこか相手を気遣つた話し方は淀みない。

「えつと……これくらいなんですかぞ」

アルは持つっていたメモ用紙を店主に見せた。店主はそれを見ると、「おや？ もしかしてあんたグリンさんのといひにいれる嬢ちゃんかい？」

思いがけない店主の言葉にアルは少し面食らつた。

「はい、そうですけど……」

自分の知らない相手が自分の事を知っているという事実にアルは警戒心を抱いて身構えた。しかし、そんなアルを見て店主はケラケラと笑い声を上げる。

「いやいや、そんな警戒しなくても大丈夫だよ。実は少し前にグリンさんの所に食事をしに行つた時に君の事を見かけてね。噂の可愛らしいお嬢さんがどれほどか確かめに行こうって友人に誘わされて行つたのだけどね。

そうしたら見かけない白髪の小さな子供がたゞたゞしく料理を運んでいる。しかもそんじょそこらじゅうお皿にかかるないような可愛いさときた。

それに、後から聞いた話じゃ君の保護者はあのフィードだつていじやないか。実は前に荷物の護衛を彼に頼んでトリアの方の村に

行つた事があつてね。その時野盗に襲われたんだが、彼は難なくそれを追い払つてね。あれは見ていて気持ちのいいものだつたな。

まあ、そう言つた訳で私は少々君たちの事を知つてるんだよ。もつともそれは私だけに限らず、下町の人間の大半はもう彼の事を知つてゐると思うよ。良くも悪くも彼は目立つからね

長々と続ける店主の話に一度も口を挟む事をなくアルは黙つて聞いていた。確かに、フィードが荷物の輸送の護衛をするといつて数日アルの元を離れた事はこれまで何度もあつたため、店主の話は信用できる。問題はそんな事よりも自分とフィードが自分たちが思つてゐる以上に下町の人間に覚えられているという事だつた。

「そんなに私たちには有名なのですか？」

「そうだねえ。ただでさえこの下町といつて住んでいる人々は刺激に飢えているからね。ちょっとした話題でさえここじやすぐに広まるよ。それにさつきも言つたけれど、君たちは良くも悪くも目立つからね……」

良い方はともかく、悪い方で目立つのは願い下げしたいのだが、その悪い方で目立つてゐるのは少なくともアルではないため、今すぐこはざりますることもできないのだった。

「ありがとうございます。以後気をつけるように言つておきます」

店主が用意した肉の入つた包みを受け取り、代金を支払う際にアルはそう伝える。店主は何の事だか分からぬのか首を傾げていた。

その後も残りの材料を買う時に、店員や店主から「グリンさんの所のかわいいお嬢さん」と言われ、じろじろと眺められ、果てはフ

ードを取られて頭を撫でられる始末だ。さすがに、それについては怒ったアルだつたが、怒り方も強く言えないため、黙つたままじつと不満げに相手を睨みつけるだけになり、結局それもまたかわいいと評される要因の一つになるのだった。

「はあ、ただ買い出しに出かけただけなのに疲れました……」

両手いっぱいになつた買い物品を抱えながらアルはグリンの元へと向かつていた。道中で何度か見知らぬ人々に声をかけられて困つたが、特に何かをされる訳でもなかつたので、よかつたのだが。

「そもそも、みんな私が奴隸だつて事知らないからあんな風に気軽に声をかけてくれるんですよね」

自分の肩に刻まれている烙印を一瞥してアルは独り言を呟く。

「実際に知つていても普通にしてくれるグリンさんはきっと珍しい人なんでしょうね。あれを普通だと思いたいのは私の希望でしょうし」

実際、このセントールに来てから、今までのようになじみで差別されるような事は余りなかつた。物珍しそうに皆に見られるのは変わらないが、それで気恥がられたりすることはほとんどない。他国との貿易をしているこの国だからこそ、アルのような変わり種の人間を見る機会は少なくないのだろう。

しかし、奴隸となるとまた扱いは変わつて来る。アルを最初に買った主とまではいかないものの、少なくとも今のアルとフィードのような関係性は見られない。奴隸は主人を立て、彼らの言つ事に従順でなければならぬ。

そして、彼らに対する一般人の対応もまた粗雑だ。奴隸が粗相をし、それが気に入らなければ乱暴な扱いを受けて当たり前。もちろん、奴隸は主の所有物なのでそれで怪我をした場合は主にそれ相応の金を支払わなければならないが、結局全て金で解決でてしまう。

(……やつぱりこの世界はお金が全てなんでしょうか)

そう思い、すぐさま否定をする。それは彼女自身を助け、面倒を見てくれているフイードに対する侮辱だ。

アルは彼の屈託のない子供のような明るい表情を思い出し、

(とはいっても私たちの場合はマスターに面倒を見てもらっているのか、私が見ているのかどっちなのかわかりませんけど)

やれやれと思っていると、気が逸れていたせいか、前を歩く子供にぶつかってしまった。

「うわっー。」

「あっ……」

アルと同じようにフードをかぶっていた少年が持っていた硬貨袋を落とし、アルも持っていた材料を地面に落としてしまう。慌てて落ちた材料を拾うアル。幸い、材料は包みに包まれていたため、汚れずにすんだ。そして、アルの足下に落ちた相手の硬貨袋を拾つて手渡そうとして気づく。

(これ……マスターの硬貨袋)

フイードがこれまで使っていた硬貨袋がアルの手元にあった。普

通の硬貨袋であれば気づかなかつたが、アルは何度かフィードから買い出しを頼まれてこの硬貨袋を使った事があつたのだ。そして、それがフィードのだと気づく決定的な要因となつたのは、一度袋の底が抜けた時にアルが縫つて直した痕が残つていたからだ。

自分で縫つたものを忘れるほどアルも子供ではない。おそらく、この少年が昨日フィードから硬貨袋を盗んだ少年なのだろう。

そう理解するとアルは手にした硬貨袋をギュッと握りしめて目の前にいる少年を睨みつけた。少年の方もアルが硬貨袋に関して何か気づいたと悟つたのか、徐々に距離を取り、恨めし氣に一瞥するとその場から逃げ出してしまつた。

「まつ……」

静止の言葉をかける間もなく少年の姿はその場から消えた。アルは手にした硬貨袋と材料を何度も見て、何事もなくすんでもよかつたと安堵するのだった。

(マスターの硬貨袋も戻つてきましたし、これで今月の家賃も払えそうです。本当に世話が焼けます。この事を話したらマスターの事ですからきっと褒めてくれますよね……)

フィードに優しく褒められることを想像すると自然と緩む頬を抑える事ができず、終始笑顔のままアルはグリンの元へと歩いて行くのだった。

アルが買い出しを終え、グリンの元に向かっている頃、フィードは下町での聞き込みを行っていた。一昨日まで連續で起つていた盗賊の犯行は何故か昨日は起らなかつた。

「あれじゃねえか。人を殺してビビつちまうような小心者だつたんだろ。実際盗られたものもそこまで高価なもんじゃないつて聞くぜ。だいたいこんな下町にそんな高価な金品があるわけねーだろうが」

けだるげに答えるのはフィードより頭一つ低い青年。栗色の髪に緑色の瞳。年はもう20を超えているのだが、身長が同年代の者に比べて低い。そのため、年齢よりも幼く見られるのが悩みである青年だ。

「そう思うか？　でも昨日はたまたま現れなかつただけかもしねないだろ。そいやつて油断させておいてつていう手かもしれないと思うぞクルス」

クルスと呼ばれた青年は頭をかき、まじめに考えようとするがどうにも落ち着かない。彼はこのように考へるよりも身体を動かす方が得意なのだ。

「まあ、そうかもしだねーけどよ。第一なんだつてここなんだ？　そりや、フランでやるよつかセントールみたいな貿易国での盗みの方がリスクも低いし、やりやすいかもしだねーけどよ。わざわざ都市部に来なくたつてフランの端にあるような村に盗みに入った方がもっと金も入るし、楽だと思うんだけどな」

と、一般人にあるまじき過激な発言をするクルス。こんな事を言つてゐるが、實際彼は盗みを働いた事など一度もない。本人曰く言うだけなら自由という考えに基づいての事だった。

「確かに。それとも、ここじゃないといけない何かがあつたのかもしれないってことかも」

口元に手を置き、フィードは熟考する。そもそも、ここ最近特に大きな事件のなかつた下町で何故急に盜賊が出るよつになつたのか、それが問題だ。一番に考えられるのは亡命者の存在。この国が他国からの亡命者を暗黙の了解で受け入れてているのは周知の事実だ。事情を知らない亡命者が金品欲しさから金を盗み逃げ回つているというのが現状一番考え方られる線だろう。

しかし、どうにも腑に落ちない。そもそも亡命をするなら余程の事がない限り事前に下準備をして来る場合が多いはずだ。他の國の権力者で、その存在が高位であればあるほどこの國の権力者への根回しをしているはずだからだ。

それに、それほどの権力者でもただの富裕層であるのならば、まづ盗みになど入らない。それは彼らの持つ意味のないプライドが大抵の場合は障害になり、行動に移せないし、人を殺した場合は後ろ盾がないので良心の呵責と罪悪感から普通にしていられないからだ。

となると、この場合は権力者であるかどうかは置いておいて、金銭に余裕がなく、事前に計画をしてなく突発的な結果から亡命する事になつた亡命者でそれなりに頭も回る相手だと考えた方がいいだろつ。

相手の頭が回るとフィードが考えたのはそれなりに日数が経ち、毎日犯行を行つてゐるにもかかわらず、相手の特徴が少しも分かつていないと、現状を鑑みての事だった。

「これはだいぶめんべくそうだな」

事態が思つた以上荷厄介であるといつ事によつやく気がついたフイードは思わず愚痴をこぼした。

「おいおい、しつかりしてくれよ。お前にどうにかできない問題だつたら俺たちは特に役にも立たない騎士団たちに問題解決の要請をださなくちゃいけないんだぜ。あいつ等に金を払うくらいだつたらパーツと酒場で飲み食いした方がまだマシだぜ」

両手を大きく広げ、金をばらまく仕草をするクルス。その言葉の端々に騎士団に対する嫌悪感がにじみ出していた。

「お前、相変わらず騎士団が嫌いなんだな」

思わずフイードは口を挟んだ。

「あつたりまえじゃねーか。あいつらが俺たちにしてくれたことなんて糞みて なもんだぞ。大雨で街が浸水した時も、俺たちが必死に土嚢を積んでる中、酒場でただ酒を飲んでいるくらいで、終わつてみれば派遣要請をした分の謝礼を寄せせとか、殺人鬼の亡命者が下町をうろついてた時に要請してみれば、殺人鬼に鉢合わせしてビビつて逃げ出す始末。

それでいて金は要求する。中にはまともな奴もいるけど大半の騎士団はそんな奴らばかりだ。これでどうやって好きになれて言つんだよ」

憤りを隠すことなく、心に溜まつているものを思いつきり吐き出すクルス。その大きな声に驚いたのか、通りを歩く他の人々はビクリと一瞬身を震わせたが、誰も彼を注意することなくその場を立ち

去る。

言葉には出さないが、他の下町の人々も彼と同じような考え方なのだろう。

「だからさ、俺たちはお前が来てくれて本当に感謝してるんだよ。腕は立つのに全然金銭を要求したりしねーし。俺たちの事を下に扱つたりしないでいてくれるしさ。なんだかんだ困つてたら助けてくれるのはお前くらいだよ。」

だから俺は今回の件もお前がどうにかしてくれるって信じてる。それはきっと他の下町の奴らも一緒だ。だから、みんなお前が今までどんな風に生きていたか聞かないし、興味もない」

真っすぐな眼差しでファイードを見据えるクルス。その視線にファイードは自分の視線を交わらせることなく、

「いいのか？ そんな事言つてこるとこざ事が起つた時に後悔するや」

「そんときはおれや下町の奴らの見る田がなかつたつてことだ。だいたいお前はそんな」としねーよ」

「ど」からくるんだ、その根拠は

肩をすくめてファイードは呆れる。

「強いて言えば……勘？ 他にも理由はあるけどな」

「勘つて……一応お前この地区的次期町長だつたが。そんなあやふやなもん信じるなよ。で、他の理由つて言つのは？」

「色々あるけど、一つあげるならアルちゃんに対するお前の態度だな。他人に対してもあれだけ優しくできる奴が大それた事件とか起こそわけないだろ。それが奴隸ならなおさら……な」

クルスの思いがけない言葉にフィードの視線が鋭くなる。

「お前、それをどこで……」

しかし、フィードの鋭い視線を飄々と受け流してクルスは答える。

「そりや、お前。これだけ長い間この町に滞在してればそれくらいの事は分かる奴の一人や二人出て来るさ。まあ、この事を知っているのは俺も含めて数人程度だから安心しろつて。べつに言いふらしたりしねえからさ」

その言葉の真意を探ろうとしたフィードだが、どうやら言葉通りの意味と受け取ってもいいようだ。自分と一緒にいる以上、周りで起こる騒ぎになるべくアルを巻き込まないように心がけている。グリンの元に預けているのもそう言つた考えがあるからだ。

だからこそ、今のようにクルスがアルの素性を知つて、それが公になつたときの彼女への被害はかなりのものになるだろう。

一部の人は理解を示してくれるかもしないが、ほとんどの人は態度を変えるだろう。まだどこの国でも奴隸といつものへの差別的扱いは根深く存在しているのだ。

「ならない。お前を信用する」

「さすがフィード。下町の何でも屋！」

ドンドンと肩を叩くクルスの腕をフィードはうつとうしやうに振

り払い、

「それじゃあ、なるべく早く問題を解決するよ。みんな迷惑してい
るみたいだからな」

「おひ、よろしく頼むぜー！」

クルスと別れて再び下町をぶらつくフイード。問題を解決するた
めの糸口はある程度掘めていた。この手の依頼はフイードにとつて
初めてではないのだ。

「さて、それじゃあ次の被害が出る前に犯人を捕まえるとするか

そうしてフイードはある人物を探し始めた。

その相手はフイードが昨日財布を盗まれた少年だった。

捕われたアル

材料をグリンの元に届けたアルは一階に上がる。被つていたフードを脱ぎ、換気するために開けていた窓を閉め、その後一階に下りていった。

一階に降りると、そこには焼きたてのパンをバスケットに入れて運ぶグリンの姿があった。

「お使い」苦勞様アルちゃん」

労うグリンにアルは、

「いえ、これくらいできて当然です。私ももう『子供』じゃありませんし」

さも当然のように答える。やたらと「子供」という部分を強調しているが、本人は子供扱いされるのがよほど嫌なのだろう。

「そこの？ センカクお使いに行つてくれたお礼に焼きたてのクッキーを食べてもらおうと思つたのに……。子供じゃないのならアルちゃんはいるないわね」

アルが反応する事を分かつていてあえてグリンは挑発的な態度をとる。アルは甘いものが好きなのだ。

「そ、そりですね。私は子供じゃないので、そんな……甘いものなんて……」

フイードがこの場にいたのなら「お前なに変な意地張つてるんだよ。いつも食べてるだろ」とツッコンあとでアルに怒られているのだが、当の本人は今ここにいなため、話が進まない。

グリンもアルが甘いものを食べるのが好きだと分かつてやつている。元々帰ってきたアルとグリンの二人で食べようと思つてクッキーを焼いていたのだ。ここでアルが意地を張り続けて食べないなんていうことになると、グリン一人で全て食べるには少々量が多いため、食事を取りにきた宿泊客にサービスとして出す事になってしまった。

さすがにそれはもつたいないかなと思つているグリンなので、結局今回はアルが折れることで話は終わるのだ。

そのアルはというと、甘いものを我慢する「大人」というプライドと、好きなものを好きなだけ食べたいという「子供」との二つの間で激しく心が揺れ動いていた。

（くつ！ グリンさんは私が甘いものが好きだと知つてゐるはずなのに……。いえ、知つてゐるからこそ、こんな風に意地の悪いことをするのですね）

グリンの精神攻撃に必死に耐えていたアルだったが、厨房にある釜から漂うクッキーの甘い香りを嗅ぎ、とうとう折れてしまった。

「食べます。クッキー食べます……」

自分が必死に強調していた「大人」の面をあつさりと覆されて悔しいのか、アルはブルブルと小刻みに肩を震わせていた。

そんなアルの様子が面白いのか、グリンは口元を抑えて必死に笑

いを堪えていた。

「まあまあ、子供は素直が一番だよ、アルちゃん」

そう言つて皿に大量のクッキーを乗せてアルの元へ持つて来る。

「ほり、焼きたてのつむぎで食べてくれ」

アルは受け取った皿を手に取り、空いている席に座り、甘く香りのよいクッキーをじっと見つめていた。

（むむむ。これはおいしそうです。クッキーの上につまづくと蜂蜜が塗つてあって、それが香りを更に引き立てています）

おずおずとクッキーに手を伸ばしてクッキーの一つを掴んだアル。ゆっくりとそれを口元に運び、一口。深く味わうように口にしたクッキーの欠片をよく咀嚼し、原型を失ったそれを飲み込む。

「おいしい。おいしい……です」

一口食べてすぐにアルの表情が変わった。パッと表情が明るくなり、次から次へとクッキーを手で掴み、口へと運んで行つた。

「おやおや、そんなに急がなくてもクッキーは逃げて行かないよ」

飲み物を取りに厨房の中に入りながら、グリンがアルに注意する。しかし、アルは食べる事に夢中なのか、グリンの声が届いていないようだった。

やがて、グリンが持ってきた飲み物を手渡す頃には皿の上には何

も残つていなかつた。結構な量、そもそもグリンとアルの一人で食べる量だつたのだが、結局アル一人で食べてしまつた。

グリンが一人分の飲み物を持ってきた事でようやくアルも一人でクッキーを食べるつもりだつたといつことに気がついたアルは、

「すみません……私、一人で食べちゃいました」

意地汚さからの羞恥や、食べる事に夢中だつた姿を晒していた事からか、アルは顔を真つ赤にして俯いてしまつた。

「いいんだよ。あれだけ喜んで食べててくれたのなら作つたかいがあつたつてもんだよ。気にしないでおくれ」

「でも、グリンさんも一緒に食べるつもりで作つてくれていたのに、申し訳ないと思つているのか次第に声の小さくなつていくアルに、「いいんだよ。私の分はなくなつたけどまだ作つていないファイードさんの分が残つているからね」

意地の悪い笑みを浮かべ、グリンはアルの肩を叩いた。それで、アルもグリンの言わんとしている事を理解した。

「はい、マスターには内緒ですね」

親しいものにだけ見せる笑顔でアルは元気よく答えた。女一人だけのお茶会は、穏やかな時間と共に過ぎて行つた。

突然のお茶会を終え、グリンが厨房の奥で溜まっている洗い物を片付け、アルは食事場の掃除をしていた。手にした箒で床に溜まつたホコリを隅に追いやり、それを一ヶ所に集める。その後、集めたホコリを外に掃き捨てる。

「これで、一段落です」

自分のやる事を終えて満足そうにするアル。外はもう昼を過ぎているせいか、日射しが更にキツくなっていた。澄み渡った青空が真上に広がり、下町の通りを心地よい風が吹き抜けていた。

（今日もいい天気です。後はマスターが頑張って依頼を片付けてくれれば問題ありません）

穏やかな天候とは打って変わつて通りを歩く人の様子はどこかぎこちない。連日の盜賊騒ぎ、特に一昨日の殺人が影響しているのだろう。

と、通りを歩く人々に目を向けていると、アルは視界の端に今朝出会った少年の姿を見つけた。

（あれは……マスターの硬貨袋を持っていた）

少年はじつとこっちを見つめていたが、やがてそっぽを向いて路地裏に向けて歩き出した。

「待つて……」

アルは持っていた箒を放り出してすぐさま少年の後を追いかけ始めた。何故、と問われるとアル以外には答えられないだろう。少年

がアルを見ていた瞳がどこかもの悲し気で、追いつめられた様子に見えたからだ。

それはかつてアルが叔母の元で生活していて、盗みを働く直前までしていた様子によく似ていた。だからこそ、アルは少年の事が気になり、何を思つ訳でもなく、その背を追いかけたのだった。

日の当たらない路地裏を少年は自分の庭を歩くように進んで行く。アルは少年から離されないようにするので精一杯だ。

異臭のする路地裏。浮浪者が建物に背をもたれている。アルは得体の知れない恐怖と不安から周りに視線を映さないようにして少年の姿だけを追いかけた。

やがて、路地裏の一角にある古ぼけた建物の中に少年は入って行つた。

(「こは、どこでしよう。一体私はどこまで来たんでしょう）

少年を追いかける事だけに集中していたせいか、アルは今自分がどこにいるのかもわからなくなってしまった。唯一道を知つていている少年は目の前にある建物の中に入つてしまい出でこない。

このままここにいてもしょうがないと悟つたアルは、少年の入つて行つた建物に入る事に決めた。

ほとんど錆びていい扉に手をかけ、静かに扉を開ける。光の入つていらない室内は薄暗くひんやりとした空気が漂つていた。一步、一步と足場を確認しながらアルは進んで行く。次第に暗闇に目が慣れてきた。周りを見回して室内の内装を見た限りでは、どうやらここは酒場の跡地のようだつた。

と、不意に部屋の隅で何か動くものをアルは見つけた。先ほどの少年だろうか？ そう思つて急いで近づく。

「あ、あの！」

いつもより少しだけ大きな声で話しかけるアル。しかし、そこには先ほどの少年ではなかった。

重しのついた鎖に繋がれ、涙で頬を濡らしている少年少女がそこにいた。小汚い衣装に身を包み、破れた衣装から見える肌は殴られたのか青くなっていた。その姿を見てアルはゾッとした。

（これは、これは……。市に出される前の奴隸です）

アルはかつての自分の姿と少年少女たちの姿を重ねる。個人所有の奴隸となる前は、彼らは魔法で刻まれた烙印を押されず、買い手が見つかるまではこのように鎖で繋がれて逃げられないようにさせられるのだ。

（しかし、何故こんなところにこんなに多くの奴隸がいるのですか？　これだけ多くの子供がいなくなれば誰か気づくはずなのに）

奴隸自体はこの世界に数多く存在するが、中には奴隸の売り買ひを嫌う者もいる。おおっぴらに市場を開く事は品がないとして奴隸を数多く所有する富裕層の間でもあまり好まれていない。そのため、こういった奴隸を売り買ひするのは富裕層の家や隠れた場所で開かれる市に参加するという事になる。

そもそも奴隸とは罪を犯したものを金で引き取つて奴隸にしたりする例が普通なのである。敗残兵が奴隸になるという例もあるが、全く何をしていいものを連れ去つて奴隸にするのは違法として罰せられる。

しかし、バレなければ何も問題がないことから、無理矢理人をさらつて契約をさせ、自分の奴隸にするということが今までになかつたわけではないのだ。

かつてフィードがアルを助けた後にそんな話をしていた。

(少なくとも十人以上の子供がここにいます。これが全員この地で手に入れた奴隸だとするといふ何でも多すぎます。これは絶対に無理矢理連れてきたに違いありません)

見ると、子供たちはアルの姿を見て怯えていた。それは、アルの様子を見て怯えているのではなく、自分を追いつめる相手の仲間だと思い、怯えているのだ。

(どうにかしないといけません。ひとまず口ひを出て、グリンさんの所へ戻つてマスターに助けを求めれば……)

そこまで考えて入つてきた扉に戻ろうとした時、アルは扉の前に黒い大きな影ができている事に気がついた。

「あつ……」

明らかに自分よりも力があり、強さを持つている存在にアルは身をすくめた。

「おうおう、どうしたんだいお嬢ちゃん。道に迷つてこんなところまで来たのかい？ 駄目だなあ俺たちに取つて大事な商品を見ちゃあ。これは大事な顧客に売るものなんだから……」

恐怖から身体が震え、カチカチと歯が音を鳴らす。

「あ、ああ……」

思い出すのは暗く、狭い地下室。あの時はそこまで不安も、恐怖もなかつた。失うものがなかつたから。しかし、今のアルには失いたくない大切な日常があつた。

いつも彼女の傍にいて優しい言葉と温かなぬくもりを与えてくれた青年。憎まれ口を叩きながらも一番信頼を寄せて傍にいてほしいと感じ、暗闇からアルを助け出した救世主。居場所を与えてくれた大好きな相手。

だが、今ここに彼の姿はいない。目の前にいるのは帰ってきた暗闇からの使者。

アルに向かつて迫る大きな手、それを振り払う勇気も力もないアルは、ただただその場に立ち尽くすしかなかつた。そして、アルを掴んだ男の横にいるもう一人の男の姿が目に入った。

「ふむ、少々暗いですね。これじゃあ、新しく入ってきた商品がどのようなものか見えません。明るくするとしましょっ」

そう言つて男は手のひらを上に向けて魔術の詠唱を始めた。

「天を照らす太陽の欠片。その欠片の欠片を我に与えたまえ フ

レア 「

詠唱が終わると男の手に拳一つ分の大きさの小さな火球が現れた。それは部屋の中を照らし出し、今まで見えなかつたものを見えるようになつた。

アルを掴んでいるのは無精髭を生やし、獣のような髪をたなびかせる無骨な男。そして、その隣にいて部屋を明るくしているのはフ

ードを被り、眼鏡をかけたビーバーが栄養不足な感じのする細身の男。

「へえ、アルビノの少女とは珍しいですね」

「ん？ なんだ、こいつだいぶ変わった容姿だが、やっぱり珍しいのか？」

「ええ、滅多にお目にかかれない突然変異種ですよ。その容姿の珍しさから市場では高値で売れます」

眼鏡を抑え、男が解説をする。

「ほお……そりゃとんだ掘り出しものだ。金の方から俺たちのところにやって来るなんてツイてるな」

「やつですね、どうやってここに辿り着いたのかは分からないですが、見たところ見た目も綺麗ですし、売り物としてはかなりの良品です」

既に男一人のアルを見る目は物扱いになっていた。一人の頭ではアルがいくらで売れるのかとう考えしか、もうないのだらう。

「ゲーブ様」

と暗闇の奥から新しい声がした。

「ん？ なんだ、イオか。仕事もしないで、お前はなにをやつてるんだ」

暗闇から姿を現したのはアルがずっと追いかけていた少年だった。

「いえ、仕事は今からするつもりです。ですが、契約の確認をと思いまして」

少年は凜とした姿でゲーデと呼ばれた無骨な男の前に立っていた。

「おお、そのことが。心配するな、この件が上手くこつたらお前を自由の身にしてやる。契約どおりにな」

その言葉を聞いて暗く沈んでいた少年の瞳に火が灯る。

「わかりました、その言葉を信じます。では、今から仕事にいきます」

「ああ、せいぜい町の奴らの注目をそつこに向けておけよ」

少年はそう言い残して扉から出て行った。ただ、扉を出る直前、一瞬だけアルに哀れみとも似つかない視線を向けるのだった。

「さて、じこつまびづあぬか」

「そうですね、ひとまず他の奴隸候補と一緒に鎖につないでおぐのがいいでしょ。どうせ向もできないだの子供でしょ」

「子供」という言葉を強調されてアルは悔しさから歯を食いしばった。男の言つ通り、アルは一人では何もできない無力な子供だったのだ。

(マスター……マスターっ……)

足に枷を付けられ、身動きの取れなくなつたアルは自分の主に向けて助けを求める事もできず、祈る事しかできないのだった。

鎮火

下町での少年の探索を続けていたフィードだつたが、一向に少年を見つける事ができずにいた。少年の手がかりになりそうな物があれば探査魔術で居場所を見つけられる事もできるのだが、手がかりが一つもない現状では聞き込みと足を使つた探索方法以外にない。

気づけば、太陽は空に昇りきり、グリンの元を出でから、もうずいぶん時間が経っていた。

(そういえば食事もろくにとっていないな。一度グリンさんの所に戻るか)

強くなる日射しに手で影を作つて光を遮る。フィードはグリンの元へ食事をとりに戻つた。

「あら、フィードさんお帰りなさい。成果はあつた？」

戻ってきたフィードを笑顔で出迎え、グリンが厨房から声をかける。

「ただいま、グリンさん。成果のほうはあつたといえば、あつたかな。事件解決の糸口は見えているからもう少し待つてくれればどうにかできると思います」

「そうなのかい、それは頼もしい！ それじゃ、これは私からの激励だよ」

そう言つてグリンが厨房から取り出したのは鶏肉の蒸し焼き、焼

きたてのパン、それからヴィシソワーズだった。フイードはそれらが並べられたカウンターの席に座った。

どれも食欲をそそる香りを漂わせており、フイードの口内で唾液の量が増える。

「これ、いただいても？」

「もちろん、そのために取つておいたんだから」

軽快な笑みでグリンが答える。その様子は早くフイードの食べた反応が見たいといったところだ。

「じゃあ、いただきますね」

「うそ、おこしいですよこれ」

いつも通りとこつとあつがたみがないよつて聞こえるが、フイードにはグリンの料理はこつもおいしく食べられて満足のこべ物だった。この下町に下宿するようになつて最初の頃、フイードは酒場などで食事をとつてこつたが、グリンの、

『当分の間ここに滞在するつもりなんだる？　だつたら食材さえ用意してもらえればうちで料理を作るよ。もちろん、サービスの一環として普通に料理も出すけどね。ただ、そつちは料理も決まつてし、別で料金を取るよ。まあ、どうするんだい？』

と、あつがたい提案をしてもらつてからとこつもの、食材の買

い出しをしてきてはグリンに調理してもらっていたのだ。

「やう言えば、アルの姿が見えないんですけど、あいつもひ部屋に戻りました？」

いつもなら自分が食事を終えていても、フィードのすぐ横に座つて傍を離れようとしない少女の姿が見当たらず、フィードはなんだか居心地が悪くなつていた。慣れ親しんだ存在がすぐ近くにいると、いつことを当たり前に思つていたせいだろう。

フィードにとって、アルはそれほどまでに傍にいて当たり前の存在になつていた。

(子供の面倒を見るのは)これで一度田だな)

気の強かつた、かつての少女の姿を思い出してフィードは知らぬ間に笑みを零していた。一年ほど前に訳あって別れた『彼女』だが、元気にしているのだろうか？ そう思つたが、すぐさま自分にはそんな心配をする資格はないと否定する。

……いや、きっと恨まれてるだろ？

何も話さずに、知人と呼ぶには薄い縁の相手の元に置き去りにして別れた。それまで自分の事を家族のように慕つていた彼女を裏切つたのだ。恨まれない方がおかしいだろう。

その事を考へると胃の辺りが急にドッシリと重みを増し、おいしかったはずの料理が急に味氣ない物に変わってしまった。食欲もなくなり、料理を運んでいた手も止まつた。

「おやおや、なんだい。アルちゃんの姿がないからつて食欲をなく

されちや、せつかくおいしい料理の材料を買つてくれたアルちゃんがかわいそうだよ

「あ、この料理の材料アルのやつが買つてきたんですか……」

「やうだよ。だから残すなんて真似をしたらアルちゃんに失礼ってね。それと、さつき部屋の掃除をさせてもらつた時に気がついたんだけどね、部屋の机の上にあなたの硬貨袋が置いてあつたよ」

グリンの予想外の一言にフィードは思わず座つていた椅子を倒す勢いで立ち上がつた。

「それ、本当ですか！」

フィードの反応に面食らつたのか、グリンは言葉に詰まりながらも、

「あ、ああ。ホントだよ。買い出しに出かける前には何も言つてなかつたから、出かけた時に拾つたんじゃないのかい。中身もちゃんと入つっていたし。見つけてくれたアルちゃんに、きちんとお礼を言うんだよ」

グリンはアルにお礼を言つずにフィードに促すが既にフィードの耳には言葉は届いていなかつた。

(アルが俺の硬貨袋を拾つた？ しかも中身があつたつていふ)とは相手はまだ金を使つていなかつたのか。いや、それはいい。これはチャンスだ。もし硬貨袋を持つていた相手と接触していたのなら、相手はアルと俺の関係を知らない。それなら、アルに手伝つてもらつて……)

そう考えたところで、フィーデは自分の考えがこれまでの行動と矛盾している事に気がつく。

(シ！ そりゃないだろ！ アルはこいつた荒事から無関係の場所にいたせうつて決めていたはずだ。そのために今まで依頼があつても遠ざけていたんじゃないか。ちょっととの気持ちで首を突つ込まれた結果は『彼女』で懲りたはずだろ)

フィーデの並々ならぬ雰囲気を察したのか、グリンは黙つてフィーデの傍を離れて厨房へと戻つていった。

(しかたない、少し遠回りになるかもしねないが、ひとまずアルに話を聞いてみよう。それによるとまだ相手と会つたと決まつた訳じゃない……)

残つた食事を一気に胃の中にかき込み、フィーデはその場を後にして、一階にある血圧に向かつた。

「アル～ ちょっとといいか？ 聞きたい事があるんだが」

扉を開けながら声をかけるが、室内にはアルの姿は見当たらなかつた。

(あれ、いないのか？ しかたない、グリンさんこちよつと聞いてみるか)

再び一階へと降りたフィーデは厨房の中にいるグリンへ声をかけた。

「すみません、グリンさん。アルの姿が見当たらないんですけど、どこへ行つたかわかりますか？」

「アルちゃん？ そう言えば、食事場の掃除を頼んでから姿が見当たらないね。……そう言えれば、外にゴミを捨てに行った時、何か見つけたのか箋を放り出して勢いよく走り出したのを見たような……」

グリンの言葉にフィードは背筋が寒くなるのを感じた。

（まさか、アルの奴。一人でなにかしてるんじゃないんだろうな……）

アルがフィードの力になりたいと思つていていたことをフィードは以前から気づいていた。

かといってフィードもアルを荒事に巻き込むつもりはなかつたので、グリンの手伝いをさせるという理由を与えて自分の力になつていると言い聞かせてきた。しかし、アルはどうなく不満げだとう事も感じていたのだ。

（頼むぞ、頼むから今回の依頼に巻き込まれてくれてるなよ。下手をするところの件はかなり大事なんだ……）

先ほどから何度も速いテンポで拍動する心臓を掌で抑え、不安を隠そうとする。そして、フィードが不安を抱くのと同時に外から大きな声で、

「おい、盗賊が出たぞ！ 今度は家に火を放ちやがった！ 誰か水を、水を持ってこい！ 」そのままじゃ他の家にも燃え広がっちゃう

フィードの不安を更に増大させる声が聞こえてきた。

(つたぐ、こんな時に……。まさか狙つてやつてるんじゃないだろうな。いや、そんなことより今ならまだ盗みに入った奴もそう遠くにいっていいはずだ。この犯人が俺の予想通りなら近くにいれば捕まえられるはずだ)

勢い良く宿を飛び出し、フィードは煙の上がる方角へと走り出した。

フィードが現場に着いたときには、既に火の手は高々と上がり、民家一軒を丸々包み込んでいた。燃え盛る炎は隣接する家屋に進行しようとして始めている。

そんな強大な力に必死に抗うように下町の人々は用水路や噴水から汲み上げてきた水を火の中に投げ入れていた。

しかし、それも焼け石に水。火の手は收まるどころか、より一層その強さを増している。

「くそっ！ どうにかなんねえのか。このままじゃ、町中が火の海になっちゃう」

緊迫した空氣の中、声を張り上げるのは下町でも顔が広く知られているクルス。いつものような調子ものの雰囲気はそこにはなく、今はただ町の危機を乗り越えようと真剣な面持ちだ。

「やっぱ言つてもクルス、炎は強くなるばかりだし、このままじゃどうにもならねえよ。それに、俺たちもどこかで見切りをつけねえと、いつ巻き込まれるか……」

クルスと同じく消火作業に当たっている男性が声をあげる。彼の言つており、クルスたちの手ではもうどうしようもできないところまで来ていた。

「なら、このまま黙つて見てろつていつのかよー。」

「しょうがねえだろ。それに魔術隊を要請すれば時間はかかるが確実に鎮火作業をしてくれる。応援を要請するしかねえよ」

「要請してもここに来るまで時間がかかるだろつがー。」

「じゃあ、俺たちに何かできるのかよー。魔術を覚えてるやつはちらほりいても、力が足りないんだよ、俺たちはー。」

男の正論にクルスは黙り込んでしまう。彼もわかっているのだ、下町には力がない。それがいくら理不尽であろうとも自分たち以上の存在に見下されようとも、彼らに力を借りるしかないのだと。

消火作業は止めることなく、それでもどうしようもない現実を前に途方にくれる彼らを見て、フィードが静かに呟くのはこの町に来て一度も口にしなかつた魔術の詠唱。口から零れる言葉とともに、静かに大気が震える。

「大気を漂う数多の液体。その欠片を集め、我に『えたまえ ア
クア』」

紡ぎだすのは水の魔術。それも、魔術を扱うものならば初步に習う基礎呪文の一つ。大気中に漂う水分を集め、固める。作られるのは拳一つほどの大きさの水球。

基礎、初歩、というものはその道を極めていくものにとつて存外無下にされがちである。それは、自身が成長するにつれ、その道でできることが増えていくからである。ゆえに最初に覚えたものも、それよりも派手で、効果の高いものが現れると、ついそちらに目がいつてしまう。そのため、どれも中途半端な習得になり、応用が利かない。

しかし、基礎を極めれば、その系統に幅広い応用が利くし、時にはそこから思いもかけない発想が生まれることもある。ゆえに、フィードはどの分野でも基礎を重要視していた。

空中にできた水球に更に魔力を流し込む。見た目は変わらないが、ものすごい勢いで水球は圧縮され密度を高めていた。やがて、圧縮に耐えられなくなり始めた水球がその形を崩そうとしたとき、

「お前ら、そこから離れろ！」

いまだ消火作業を続ける人々に向けてフィードは声を張り上げた。そして、宙に浮いていた水球を燃え盛る炎の中へと投げつけた。

その瞬間、轟とすさまじい衝撃と過度の圧縮から開放された水流が一気に弾けた。爆散した水の衝撃によつて家屋の一部は吹き飛び、先ほどまで目の前で轟々と燃え盛つていた炎は一瞬にして姿を消した。残されたのは半壊した家屋と、焦げたあとの残つた隣家。

いまだ何が起こったか理解できていないのか、周りにいた人々は呆然とその光景を見ていた。次第に何が起こったのか理解し始めたのか、人々の中の一人が声をあげた。

「や、やつた！ 火が、火が消えたぞ！」

事情を完全に飲み込めたわけではなかつたが、彼らの一一番の問題だつた燃え盛る炎の鎮火はなされたのだ。喜ぶ彼らを見て、ファイードは一息ついた。

（よし、これで問題は一つ片付いた。あとは……）

衝撃的な出来事を前に呆然としている人々から少し離れた位置で同じように呆けている少年の元へ、ファイードは一気に駆けだした。

「なつー!?

驚く少年。次の言葉を発しそうとするが、腕を後ろにねじられ、そのまま地面に押し倒された。

「さて、陽動のつもりでやつてたんだろうが前回と今回は派手に動きすぎたな。悪いが知っている」と話をしてもいいつぢ

少年の上から冷たい視線で見下ろすファイード。少年は出し抜かれたことが悔しいのか、それとも自分が犯人だとバレるようなうかつな行動をとったことへの後悔からか、歯軋りをし、自分を押さえつけるファイードを睨み付けていた。

自由

「それで、お前の知つていることを話してもらいたいんだが、いつまで黙り続けるつもりだ？」

火事の騒ぎを収める中、民家に火を放った犯人を人知れず捕まえ、捕縛魔術で抑え、人目につかないところに連れてきたフイードが問い合わせる。

「……」

しかし、相手はフイードと視線を合わさうとせず、それどころか一言も喋らうとしなかった。

「悪いが、あまりお前に構つていい時間はないんだ。暴力に訴えることはしたくないから、なるべく早く話してもらえると助かる。こつちはもう死人も出てるんだ。

陽動をするつてことは人が死ぬよりもお前たちにとつて益がある何かを裏でコソコソと行つてるんだろ？ それくらいはもうわかっている。おそらくお前が人を殺していないであろうこともさつきかつた

フイードの言葉に犯人はビクッと肩を震わせた。表情には驚きと戸惑いが混じつている。

「ど、どうして……あれが私じゃないだなんて」

「まず第一にお前は人を殺すよつな度胸を持ち合わせていない。俺の初步魔術程度で呆然とするやつが、人を殺して一日で普通に次の

犯行をするような大胆な精神を持ち合わせていなければ。他にもお前みたいな力も、知恵もなさそうな餓鬼にとつさに人を殺せる機転も器量もないってのと、それまで小さな犯行を続けていたのに、急に人を殺すなんて大胆な手を使つたってのもな」

的確に相手の分析をしていくフィードに犯人は意識していない自分ですら暴かれる得体の知れない感覚に吐き気と嫌悪感を覚えた。しかし、圧倒的力量差の相手に捕まえられ、反抗する力もないため、ただにらみつけることしかできなかつた。

「おそらくお前は裏で糸を引いているやつからすれば使い捨ての道具のようなものじゃないのか？」

人を殺したのはおそらく盗みを働いたときに相手に顔を見られてそのまま逃げ、それをお前の主人に知られたからだろう。殺したのはもちろんお前じゃないがな」

「……」

「それに、お前そんな格好してるけど女だろ。そうなるとますます信憑性が沸いてくる。お前くらいの年の男ならもう少し力もあるしな」

そう言って少年、もとい少女の胸元に視線を向けるフィード。

「それは脅しか！ 私の身体を貪りたいなら好きにしろ。どうせお前に捕まつた時点で私の仕事は失敗したんだ。あとはもう殺されしかない。だけどな、私は最後まであがくぞ。自由になるためなら最後まであがいてみせる！」

瞳に涙を集め、恐怖から必死に震える少女。そんな少女にフィー

ドは近づき、肩に手をかけた。

田を瞑り、今から起ることを想像して今にも吐き出しそうになれる少女。嫌悪感が寒気に代わり、背筋をなでた。

ビリッと両肩の布が破れる音がして、とうとう予想していることが起こったと確信する。ああ、今から自分はこの男に犯されるのだと。

田を瞑つたまま、覚悟を決める。いつそのこと舌をかんで死んでしまいたい気持ちだが、それは彼女の主であるゲードからの命令によつて自害することは不可能になつていた。つまり、このまま慰みものになるしか道はなかつた。

(くそー、こんな男に……)

悔しさと悲しさから、とうとう涙が零れ出た。今までの辛い日々のことが走馬灯のように一気に脳裏を駆け巡る。

(そもそも、あのゲードに捕まつたところから私の人生は終わつたんだ。家族のいない私を捕まえて、無理やり奴隸として契約せられて、あれこれとこき使われて。

殴られ、蹴られ、死にそうになるくらい空腹になるまで飯を抜かれて。あげくこんな男に捕まつて。せつかく今回の仕事が上手くいくたら自由になれるはずだつたのに。なんで……なんでつー…)

溢れる涙は止まることなく流れ出る。一瞬のことが永遠のようにも感じられて、閉ざされた視界の中、運命の時を今が、今かと苦痛と不安と共に待つていた。

しかし、ここまで経つてもその時はこなかつた……。

(……?)

不思議に思い、薄つすらと田を開くと、少女の肩に刻まれた烙印をじっと見つめるフイードの姿がいた。

「な、なにをしてる。私を犯すなりやつやとしひー。」

虚勢を張り、今にも消えそうなほど小さな声でフイードに告げる少女。だが、フイードはそんな彼女の様子がおかしいのか笑っていた。

「何がおかしい！　お前は私を慰み者にするためにわざわざこんなところに連れてきたのだろう？　なぜ早く私に手を出せない！？　それともお前のモノは不能なのか？」

少女が口にするにはあまりに下品で、今のこの状況では相手の気分を逆なでするだけしかないのに、少女はフイードを罵倒した。しかし、フイードはそれに答えない。文句も言わない。ただ一言。

「なあ、お前は自分がいかにも不幸でこの世の地獄にいるとしても思つていいだろ？　が、お前みたいなやつはこの世にじまんといふんだぜ。別に俺がお前より不幸だとか言つつもりもないが、どうせお前自分の主に自由と引き換えに陽動をやれとでもいわれたんだり

フイードの呪を得た発言に少女は何も言葉が出なかつた。それは全て事実だつたからだ。

「馬鹿だなあ。そんなに自由になりたかつたら何でもつと頭を使わない。さつきも言つたと思つが、お前の主はお前のことを道具とく

らいにしか思つてないんだ。自由にされたる前に殺されるつていう
考へがでなかつたのか？」

あまりにも遠慮のない言葉を投げかけるフイードに少女は眼光を
鋭くし、怒りを全身で表した。

（お前に、お前になにがわかる！ こんな辛い仕打ちも知らないで
！ 殺されるだつて？ そんなことくらいわかつてた！ でも、で
も希望がない私はそれに縋るしかなかつたんだ！）

一度は止まりかけた涙も、またポロポロと地面に落ち始めてしま
つた。悔しかつたのだ、これだけ無遠慮にものを言われることが、
それがどうしようもない事実だつたことも。

「くそつー！ くそつー！」

ただ、どうじよつもなく、少女は泣き続けた。そんな彼女にフイ
ードは容赦なく追い討ちをかける。

「どうして主を殺さうと思わなかつた？ そんなことをすり思わなか
つたのか？」

何を馬鹿なことを言つのかと少女は思つた。そんなことは今まで
幾千、幾万と考えた。しかし、一度でもそれを実行して失敗でもす
れば殺されるのは自分だ。

「本当に自由になりたかったのなら、相手に媚へつらつてでも、自
分のプライドがどれだけボロボロになろうと、相手がほんの一瞬油
断するくらいの信用を勝ち取るくらいしてみせり。

それだけで大抵のやつは殺せるんだ。それができなかつたのはお

前がそうこうしたことやる前から諦めてたってことだ。今こいつなつてるもの田の前にぶら下げられた自由つて餌にだけしがみ付いて考えることを放棄していたお前が悪い」

「ひぬわーー、ひぬわーー、なんでお前にそんなこと言われなきゃならないんだー、ひぬわこんだよ、さつきから正論ばっかり並べやがって。そんなこと私だってわかつてるよ、だからって正論が全部通るのが世の中じゃないだろうが！ それだったらどうして私はこんなに苦しい思いをしなきゃいけないんだよー」

少女の悲痛な叫びをフイードはただ黙つて聞いていた。

「私だって、私だってなー、もつと自由に生きたいよ。でも、誰も助けてくれない、気づいてくれない。だつたらどうやってもムリじやないか！ 私一人じゃ、どうあっても自由にはなれないんだよ！」

口から出でてくるのはおれらしく今まで少女がずっと抱え続けていた心の闇。誰にも話せず、一人で血の涙を流し続けていたのだらつ。

「なら、お前は私を助けてくれんのか？ ムリだろそんなことー。町にこんなことして、主に命じられたらすぐにも死んでしまう私をお前は助けてくれんのかよー。」

小馬鹿にした笑みで、それでも涙は止まらず、少女はフイードを罵倒し続けた。しかし、どうとつ出す言葉もなくなつたのか、それとも疲れ果てたのか、少女は黙つてしまつた。

「言いたいことは、それで全部か？」

その言葉に少女はうなずく。後悔はしていない。死ぬ前に聞いた

「こととは全て聞こ呑くした。

フイードの右手が徐々に少女の顔に近づく。

（ああ、今度こそ本当に終わるだ……）

再び瞼を閉じ、視界を閉ざす。ビクビクと怯えながら、立ちすくむ少女にとうとう衝撃が来た。

「イタツー」

しかし、それは予想していたものよりもまさかに小さく、たいして痛みのないものだった。

「馬鹿、お前みたいな餓鬼が人生悟つたようなこといつてんじゃねーよ」

田を開けた先には先ほどまで恐怖の対象であつた青年はいなかつた。

「今のは俺の金を盗んだ分の仕打ちだ。これだけで済ませてやるんだから感謝しない。言っておくが町に与えた被害に関する許しを許していろわけじゃない。それは後々償わせるからな」

未だにフイードが何を言つていろのか理解できない少女は、ここに来る前のように呆けていた。

「んじや、まあお前を償わせるのは自由にしてからにするか

自由とこう言葉に少女が反応する。

「な、なに言つてんだお前！ そんなことできるわけないだろ！」

奴隸の契約は主の契約解除の承諾と魔術師による解除魔術がつて始めて成立する。いくら凄腕の魔術師でも契約者の承諾がなければ烙印の解除はできないのだ。

「それができるつていつたらいつする？」

子供が親に得意なことを自慢するような、笑みを浮かべフィードが尋ねる。

「そ、そんなの。 そんなの……」

上手くいくわけない。 そう思しながらも、少女の心は揺れていた。自由が手に入れられる。もしかしたら、嘘かもしれないのに、降つて沸いた希望にどうしようもなく少女は揺さぶられるのだった。

「できるはずないって？ いいか、俺はできる。 それだけの経験も積んだ、屈辱も絶望も味わってきた。 お前みたいに死にたいようなときもあった。 でも、俺は諦めずに進んできた。 人の助けもその中についたし、自分で解決したこともあった。だからさ、諦めんな。そんな簡単にやること全部諦めてたらやれることもやれなくなるぜ」

それだけを言つてフィードは詠唱を開始した。

「正しきもの、その存在を認めない。 偽りをもつて事をなし、偽りをもつて騙し、救おう。

」の世界はかくあるべし。 虚構こそが眞実。 真実こそが虚構。 偽りの生成、その実を我に与えたまえ。

フィクション

詠唱の終了と共に何か巨大な力が少女の烙印に熱を持って集まつた。痛みはある、だが同時に何か重いものが烙印から抜けしていくのを感じた。

「これで終わり。お前はもう自由だ」

あつれりと、あまりにもあつれりと自由といつ言葉を受け渡されて少女は戸惑つた。嘘をついているのではないか？ 自分を騙しているのではないかと。しかし、そんなことを田の前のこの男がする意味もなく、今はただ自由といつ言葉を信じるしかなかつた。

「なんで、こんな風にして助けるんだ？ お前さうきはあれだけ偉そうに私に説教してたじやないか。頭を使え！ 自分で成し遂げろつて！」

「確かにそれは言ったが、あれはあくまで俺の自論だ。別にお前に強制するつもりもない。さっきのは、お前を見ていて昔の俺を見ているみたいで、むかついたから説教みたいになつたところはあるけどな」

「じゃあ、なんで私を助けたか理由を言え！ まさか助けてくれつて頼んだからとかいうんじゃないだろ？ うな！」

「ま、それも一つの理由ではあるけどな。言っておくけど今の呪文は烙印の契約解除をしたわけじゃない。解除一步手前の状態にしてあるだけだ。契約を偽りの契約で誤魔化してお前の主人からの命令が届かないようにしているだけ。だから、本当に自由になりたいの

ならお前が主人に契約解除を申し付けるしかない」

「なつー!？」

「そのままで本当に契約解除した状態と変わらないけどな。それでお前が納得するならそれでもいいが、そのままだと結局本当の意味での自由にはなれないぞ。実際に自由になつたとしてもまずは償いをさせるところから始めるけど」

「そんなことが私は聞きたいんじゃない!」

「なんだよ? 別に助けてもらつたんだからいいだろ? が

「そりだが、そりだが……」

「まあ、今の礼にお前の知つていることは全部話してもいいんだ。でないとその魔術の効果解除するぜ」

脅しの言葉を口にするフイードだが、今の少女にとってそんなものはなんの意味もなかつた。

(こいつは、こいつは私が今まで見た人間の中で一番の甘ちゃんで、お人よしだ!)

少女が自分のことを裏切ると思つていないので、さつきまでかけていた捕縛魔術はいつの間にか解かれていた。逃げようと思えば逃げられる。実際に逃げれば十中八九捕まえられるが、それでも逃げるという選択肢を用意してくれている。

少女はしばらく黙りこくつていたが、やがて口を開き、

「わかった……お前に全部話す

しぶしぶといった様子でフィードに答えた。

「ん、了解。それじゃあ早いとこ話してもらおうか。時間が経つと不味い気がするからな。 ひとつ、その前にお前の名前を聞いておかうか。名前も知らないと不便だからな」

言いつつ少女の頭を撫でるフィード。それはいつも彼の傍にいる少女にしていいことだ。背丈も年齢も近そうな少女が目の前にいたせいか、無意識に行ってしまったのだろう。

「……イオだ」

その行動に少女は恥ずかしさからか、先ほどまでは違った意味で視線を合わせられなくなり、そっぽを向いたままポツリポツリと話を始めた。

仇敵

オレンジ色に染まり始めた空。その下を走る一つの影があつた。速さは俊足。普通のものには一瞬で影が通り過ぎたとしたか捉えられない速さだろう。

身体強化の魔術を使ったフィードが、先ほどの虚構魔術を使用して際に上書きした契約魔術の縁を辿つて、ゲードたちの元に向かっているのだ。

だが、その表情にいつもの陽気な笑みはなく、代わりにあるのは鋭く冷たい眼差し。深い悲しみと燃え盛る憎しみ。長い間抑えられていた、それをぶつけることができる喜びから口元は酷く歪んでいる。人を寄せ付けない氣配を放ち、その様子はまるで鬼。

「やつが、ここにいる」

待ち焦がれた仇敵との再会に心臓がドクンと激しく高鳴る。落ち着けと心の中で叫ぶもう一つの声は今の彼には届かない。

脳裏に浮かぶのは昼間にあつた炎など焚き火に感じられるほど広く、激しく燃え盛る炎の嵐。家を燃やし、地を燃やし、熱風が吹き荒れ、息も絶え絶えになるほどの炎。

目の前で凄惨、残酷、悪趣味極まりない殺し方をされ、殺されなお弄繰り回される知人、友人、家族を見せ付けられ、それでも死ぬことは許されなかつた……かつて。

己の無力をかみ締めさせられ、下卑た笑いと共に去つていった仇敵。

『十一支徒』

数年前、東の武の国ジャンを騒がせた犯罪者集団。個々の実力はまさに絶大。盜賊など生ぬるい。

やつらは災厄。襲われたものはひとたまりもない。諦めるしかない。そういわれるほどの一団だった。

村を焼き、町を襲い、人を殺し、金を奪い、辱め、実験し、死してなおその尊厳も奪われる。

そんな一団にかつてフィードの村も襲われた。生き残ったのは彼一人。正確に言えば助けられらたのだ。よりもよって、その十二支徒の一人に。

当時の自分の無力さをかみ締め、歯軋りをする。魔力探知の結果からして距離はもうそう遠くない。相手も既にこちらが探知していることに気がついているだろう。そんなこともできない相手ではない。

グリンの元にイオを連れて戻った際、自室から持ち出した愛剣をギュッと力強く握り締める。

地を駆け、屋根に飛び移り、目的の場所まであと少し。そこでフィードは目的の場所から数十メートル単位で人払いの結界が張つてあることに気がついた。

(誘つてるつてことか……舐めた真似を!)

走る速度を上げ、目的の廃屋の屋根を突き破り、降り立つ。目の前には一人の男。その奥には身動きが取れないよう重りのついた鎖につながれた少年少女がいた。

「マス……ター？」

その中には彼を慕つてゐる少女の姿もあつた。夜の街の角でフィードは暗くてもアルがどんな様子だかわかつた。頬は赤く腫れ、殴られたのだと一目で分かつた。衣服は裂け、肩を震わせて怯えている。その様子を見て、よつやくフィードは心の声に耳を傾けた。

「心配するな、アル。もつと待つてな、すぐに自由にしてやるから」

笑顔を向けるが、身体からあふれ出るのは激しい殺氣。それに気がついたのか、ゲードが声をあげた。

「おいおい、いきなり上から落ちてくるなんて常識知りすにもほどがねえか？ よほじ教養が悪いみたいだな、お前」

戦での前口上のように挑発するゲード。

「お前らみた人に子供を使って裏でコソコソと動くような卑怯者に、教養がどうだとか説教を受けたくないな」

言葉ではゲードの相手をしてくるフィードだが、その視線は奥にいるフィードをかぶつた男へとずつと向けられている。そのことにゲードも気がついたのか、

「おー、ここつお前の知り合いか？ そうだとしたらすこぶると無粋なやつじゃねーか」

ゲードは肩をくみて男に問いかける。

「知り合いといえば知り合いですかね。ただし、お互に命を賭けあつやり取りをする知り合いですが。こんなところまで追いかけてくるなんて困ったものです。しばらくおとなしくしていたと思っていたんですがね」

それまで黙っていた男がよつやく口を開いた。しかし、口から出るのは皮肉ばかりで、フィードに氣おされた様子は微塵もない。

「黙れ。おとなしくしていたのはお前たちのほうじゃないのか？今まで派手に活動していたくせに一体どうこう風の吹き回しだ」

「どうもこうも……。私たちのメンバーをこの数年で半数近く殺した相手がうるうらしているんですよ。派手に動いて居場所を知られるのはちょっとマズイじゃないですか。

といつても私たちが集まって行動するなんてことはめったにないでの、他の人がどのような考え方でおとなしくしているかは私には図りかねますが……」

「ほつ。十一支徒ともあろうものがずいぶんと謙虚な物言いじゃねーか。そんなに自分の命が惜しいのか？」

十一支徒という名称をフィードが告げると、相手の素性を知らなかつたのか、ゲードが目を見開き驚いた。

「こいつはたまげた。ログ、お前さん悪名轟くあの十一支徒の一員だつたのか！」

ログと呼ばれた男に向けるゲードの眼差しに恐怖などなく、そこにはただ羨望と尊敬の念があるのみだった。犯罪を犯すものからす

れば、国の力すら寄せ付けない十一支徒は犯罪者たちの畏敬の象徴の一つといえるのだ。

「ええ、そうですよ。言つていませんでしたか？」

「ああ、そんなことを聞いたのは初めてだ。あなたがそんな大物だと分かつていたらもつと派手なことをやつたもんだ。こんな奴隸商人みたいなみみつちい事なんてやらず、俺を裏切ったフランの騎士団に復讐をしてやつたのに……」

「おや、物騒なことを言いますね。大体そんな派手なことをしてしまつたらフランの全騎士隊を敵に回してしまつではありますか。やるならもつと地味なところ、そうですね……騎士団の家族を殺すところから始めないと」

「声を殺して笑い声をあげる口グにフイードはどうとう我慢の限界がきたのか、

「もう喋るな。お前たちの声を聞いているだけで腸が煮えくり返る

鞆から剣を抜き出し、構える。

「死ね」

身体強化の魔術によつてあがつた異常なまでの速度で一気に相手との距離をつめる。だが、そのままあつさりとやられてくれるほど相手も馬鹿ではない。すぐさまフイードの動きに反応し、左右に分かれる。

当然フイードは十一支徒のログを追撃する。

「おやおや、そんなに私と戦いたいのですか？ 困ったものですね」

飘々とし、余裕を保ちながら、ログは廃屋の外に出た。障害物のない通りで、一人は互いに魔術の詠唱を始める。

「風よ、微細な力の塊を集め、固め、極限まで鋭く鍛えよ。
その速さとともに敵を切り裂け ウィンドスラスト」

「大気を漂う数多の液体。その欠片を集め、我に与えたまえ ア
クア」

風の魔術を詠唱するのはログ。対して水の魔術を詠唱したのがフイード。詠唱の速度は互いに同じ。だが、高位の術を詠唱しているログが初歩魔術を詠唱しているフイードと速度が同じということは、魔術の分はログにあるといえる。

幾つもの魔力光を帯びた風の刃と水球が両者の周りに漂う。

「さて、あつけなく死ぬなんて結果だけは勘弁してくださいよ」

そう言って先に動いたのはログだつた。空中に漂う風の刃の一つをフイードの首田掛けて解き放つ。

(チイツ！ いきなり致命傷狙いかよ)

とつさに風の刃を避けるが、刃は追尾してきた。おそらく、ログが操作しているのだらう。

「 ッ！ アクア！」

「フィードは叫び、宙に漂う幾つかの水球を固め、一つの大きな水球にし、それを縦に伸ばして風の刃にぶつけた。

「ぶつかり合う水球と風の刃。対消滅した二つの魔術を見て、『ほう』とログが呟く。

「やりますね。普通ならあれだけで首が飛んで終わるんですが。どうやら、他のメンバーをあなた一人で殺したというのも、あながち嘘でもなさそうだ」

「そう言つと、ログは次々に風の刃をフィードに放つた。今度は一撃必殺を狙つたものでなく、少しでもいいからダメージを与えると、いう目的だ。

フィードは自分の周りに大きな水の膜を作り出し、風の刃の勢いを吸収した。

「モノは使いようですか。なかなかどうして魔術の扱いに長けています」

新たな詠唱を始めようとするログに隙を与えまいと、フィードは張つてあつた膜を再び水球に戻し、それを投げつけた。

大量の水球が勢いよくログへと向かう。詠唱を中断するが、迫り来る脅威に慌てるわけでもなく、易々と水球の束を避ける。

「困りましたね。これは私一人ではキツイかもしれません。なので、他の者の手を借りることにしましょうか」

ログの視線の先にあるものに気づきフィードはとっさに身を捩る。いつの間にか背後にフィードの身の丈ほどはありそうな両手剣を持つたゲードの姿があった。殺氣を抑えて近づいたのだろう、一瞬反応が遅れたフィードはゲードの一撃を避けそこね、切られた左腕か

ら薄っすりと血が滲み出した。

(マズイな、一対一か。ログはともかく、ゲードとかいうやつ。たいした相手じゃないと高をくくっていたが、思った以上に腕が立つ。長期戦はマズイ。早めに片をつけないと)

フィードは負傷していない右手で剣を構え、次の一手を打った。標的をログからゲードに変え、剣を打ち込む。

ぶつかり合う剣と剣。手数で攻めるフィードに対し、一撃必殺のゲード。どっしづとした構えで、すばやく、あらゆる方向から切りつけるフィードの剣撃に対応する。そして、連撃の隙を見ては強力な一撃を放つてくる。

「なかなかやるな！ 騎士団で副隊長を務めてた俺相手にこつも切れあえるとは」

「今はただの犯罪者じゃねーか。過去の栄光を偉そうに誇るんじゃねえ！」

嬉しそうに剣を交えるゲードに皮肉を返すフィードだが、内心はかなり焦っていた。騎士団で副隊長を務めていたと豪語するだけはある力量を目の前の男が持っていたからだ。これではますます長期戦に持ち込むことができない。

どちらか一方の腕が悪ければ、そちらを片付けてもう一方の相手をすぐにできるのだが、こうなってしまってはそもそも行かないのだ。

「そり、相手は一人じゃありませんよ。サポートしますよゲード」

ログが詠唱を開始する。

「速さを、効率を求め、より単純、より俊敏に インプロスペー
ト」

詠唱を終えると、先ほじまでファイアードのスピードで遅れていたゲ
ードが同じ速度で抜け合つてしまつた。

より隙のなくなつた相手にファイアードは内心舌打ちをする。

（くわつ！　ただでさえ打ち込む隙がないのに、スピードまで追い
つかれたらますます攻めづらくなるだろうが）

そんなファイアードの考える時間すらも奪おうとグードが速くなつた
スピードで攻めこまわる。

「おおー。これは身体が軽い。ほりほり、それまでの勢いはどこ
にいった？　それとも威勢がいいのは口だけだったか？　ここまで
来ておいてそりゃないぜ、小僧」

防戦一方。さつままでとは打つて変わって守りこまわってしまつ
たファイアードはさうにか隙を見つけよつとするが、一対一のせいか、
迂闊に身を削つて攻めることもできな。

（どうする、このままじゃジリ貧だ。いずれ致命傷を負つ）

わかつてこながら、ざつしても相手の連撃を防ぐことに意識がい
つてしまつ。

（どうすれば……）

追いつかれたファイアードの脳裏にかつて告げられた言葉が浮かび

上がる。

『いいか、お前は弱い。絶対的に弱い。そんなお前が自分よりも強い相手を相手にするときには効果的なことを教えてやる。それは相手が思いもかけないことをすることだ。といつても勝算があることをしろよ、投げやりになつても意味がないからな。

これは自分が強くなつて自分よりも弱い相手を相手にするときにも有効だ。だから、自分が弱いときから実践して後になつても戦術の一いつとして使えるようにしておけ。わかつたか！？』

一つの考えが頭に浮かび、ファイアードはすぐさまそれを実行した。

銃迫り合いの際、わずかに身体を傾け、血のにじんだ左腕をゲードの身体に重なるように叩わせる。それが、ゲードには隙に見えたのだろう、両手剣に今まで以上に力を込め、一気に押し込もうとする。

「もうひつたあああー！」

その一瞬の機会をファイアードは見逃さなかつた。

「血よ、身体から流れ出た我が一部よ、その身を凝固し、敵を貫け！ ブラッディーアーナル！」

詠唱を終えると、ファイアードの左腕から流出する血が細い針のように鋭く伸び、ゲードの身体に突き刺さる。細く、薄いそれは痛みこそあれど、損傷はそれほどない。しかし、攻め立てる中で一瞬でも痛みに悶えてしまつたゲードことつてその一瞬の隙は致命的だった。

「終わりだ！」

フィードは鍔迫り合いを解き、ゲードの背後に回り、首元に魔術で強化された肘打ちを思い切り叩き込んだ。

「 かツ」

その一撃で昏倒するゲード。フィードは倒れた相手に一警すると、

「次は……お前だ」

ログの方へと向き直り、鋭い殺氣をぶつけた。

「おお、怖い怖い。このままあなたの相手をしてあげてもいいんですけど、どうもこの国のお偉方に気づかれたみたいですね。あなたが後先考えず強大な魔力と殺気を振りまくからですよ」

「御託はいい。それに俺はお前を逃がすつもりもない。お前の言つお偉方が気づこうが関係ない。俺はお前を殺せればそれでいい」

「後先を考えない馬鹿はこれだから……。そうですね、ならあなたの言葉が本当なのかどうか試させていただきましょうか。私は勝算のない戦いはしない主義ですので」

「風よ、微細な力の塊を集め、固め、極限まで鋭く鍛えよ。

詠唱省略 ウィンドスラスト 「

言ひや否やログは再び幾つもの風の刃を宙に漂わせた。しかし、簡易で作つたせいか、先ほどに比べるとその数は少ない。

「チツ！ 大気を漂う数多の液体。その欠片を集め、我に与えたま

え アクア 「

先ほどと同じように数多の水球を作り出すフィード。

「では、見せてもらいますよ。あなたの選択を」

ログの言葉と共に風の刃が一気に解き放たれる。

「甘いんだよ！ 同じ手が通じると想つてるのか！？」

フィードも同じように水球をぶつけようとするが、風の刃の対象がフィードではないと気づく。

（こままだと、これは俺に当たらない。何が狙いだ？ 時間稼ぎのつもりか？）

と、そこまで考えてフィードの背後にアルたちがいる建物があることに奇がついた。

「 ッ。これが狙いか！」

フィードはすぐさま水球を集め、建物へ向かつ風の刃を防ぐ壁とした。だが、風の刃の半数はそこから軌道を変え、フィードの元へと向かつ。

（水球を戻す暇がない。くそつー）

迫り来る風の刃を向上した身体能力でどうとか避けるフィード。地面や建物に避けた風の刃が次々とぶつかり、目も眩む砂埃を巻き上げる。

「今日は中々楽しい戦いでしたよ。いずれまた命を賭けた戦いができるといいですね」

ログの言葉が聞こえたと思つと、一瞬にしてその気配が消えた。

「ふざけるな！ 逃げるのか、十一支徒のお前が！ 待て、待ちやがれ！」

砂埃が止み、視界が開けるが、そこにログの姿はなく、フィードによつて昏倒され、風の刃によつて起こつた衝撃によつて地面を転がつたゲードの姿があるのみだった。

「ちくしょつ……」

悔しさをかみ締め、それでもログがいた場所の先をフィードは睨み続けた。

フィードは捕縛魔術でゲードを縛り、建物の外に置くと、アルや捕らわれた少年少女が待つ建物の中に入った。

「……マスター？」

「もう大丈夫だ、アル。これでみんな自由だぞ」

そう言つてフィードは風の魔術で捕まつてゐる皆の鎖を切つた。

「あとは、騎士団とかに任せることになる。これだけ大事になつて

れば」の国の騎士団とござり急げていらっしゃないだらうからな

安心させよ」となるべく優しく話しかけるフィード。そして、アルの元へと近づこうとしたとき、それは起じた。

ビクッ！

フィードが一步を踏み出した瞬間、アル以外の少年少女たちが身体を震わせたのだ。

「怖い、怖いよ……」

それはフィードがログやゲードの仲間といつ意味ではないとわかつていての言葉だった。少年たちからすれば圧倒的な力を持つていたゲードやログに変わって現れたフィードはいくら彼らと違う優しい言葉を投げかけても、より強い力を持った恐怖の対象としかなりえなかつたのだ。

そんな、周りの様子に困惑い、おろおろとするアル。

「……」

フィードは困ったよつた笑みを浮かべ、頭を搔き、

「ちよつと待つてろよ、今から町長に報告して騎士団を呼んでもらうからな。それまでここには結界を張つておいて誰も寄せ付けないようにしておくから、お前たちも動くんじゃねーぞ」

そのまま後ろを振り向き、入り口に向かつて歩き始めた。

アルはそんなフィードの背を眺めていたが、何故かフィードが遠くに行ってしまうような予感がして立ち上がり、フィードの元へと駆け出した。そして、まさに入り口を出ようとしたフィードの腰に抱きついた。

「一人で行っちゃ駄目です。私も付いていきます！」

必死にフィードにしがみ付いて離そうとしないアルに、フィードは戸惑ったが、やがてその目に浮かぶ決意の強い光に根負けし、

「わかった、わかった。アルも一緒に行くか

と、アルの同行を許可したのだった。安心したのか、アルはフィードから離れ、その隣に並び立った。

(一瞬、マスターがどこかに行ってしまいそうな気がしました。それに、みんなが怖いって言ってた時のマスターはとても悲しそうでした。なら、せめて私だけでもマスターの傍について、笑顔でいてくれるように努力します。

今回は失敗してしまいましたし、マスターについて全然知らない私ですが、それでもマスターの役に立てるようになれば……きっと)

「ん？ どうした、アル？ ほら、行くぞ」

フィードの役に立とうと考えてる最中、声をかけられたせいか、アルは驚き、つい思つてもないことを口にしてしまった。

「マスターは駄目駄目マスターですね。私がしつかりしないと

そんなアルにフィードは苦笑し、

「んな事言ひなつて。お前の面倒見てるの俺なんだから」

と返事をし、二人は町長の元へと向かつて歩き出した。

訪れた平穏

町長の元に向かい、今まで下町に起こっていたこと、そしてその裏で何が起こつていたかをフィードたちが話し、騎士団が下町へ派遣されてから約一日が経つた。

十一支徒が今回の事件にかかわっているとあって、普段はいない大勢の騎士が眞面目に下町の警護に付いているのを、当の下町の住人はあまりに見慣れない光景に驚いていた。

それでも、町長が事情を説明したことで、どうにか納得しているのか、じろじろと騎士団員を遠巻きに眺めては、よつやく戻った穏やかな生活を過ごしていた。

そして、結果だけいえば、フィードが話した十一支徒の件は騎士団が解決したという形で落ち着くことになった。

話を聞いたクルスやグリンなどはこのことに激怒していたが、フィード自身はそれでいいと納得している。

仮に、フィードがこの件を解決した当人として名乗りを上げたとすると、下町の人々は歓喜するが、中階層、上階層の人々がこの国の騎士団たちの力に疑問を持ち、いらぬ問題を引き起こしてしまった可能性がある。

それに、十一支徒をたつた一人で撃退し、浮浪児を奴隸として売りさばこうとしていたフラムの元騎士団副隊長を捕縛したとあっては、まさに一騎当千。

そんな力が下町にあるというだけでも、いつ反乱が起こつても仕方がないと思うような人も出てくるはずなのだ。

それは、身分が高く、権力に捕らわれているものであれば、より顕著に現れてしまう。

だからこそ、下町での火事を止め、盜賊を捕まえたのをフィードとし、その裏で暗躍していた十一支徒たちを撃退したのは騎士団であつたということにすることで話は着いた。

しかし、悲しいことに昔から人の口に戸は立てられないという。眞実はさまざまな尾ひれがつきながら広まり、フィードの名は結局セントール中に湾曲しつつも広まることになった。

「はあ……。まったく、何でこんなことになつたのやう」

レオードの酒場で酒を口に運びながら、フィードはため息をついた。カウンターでのんびりと酒を飲む彼の周りには既に酔いつぶれた下町の人々の山が積み重なっていた。

「そんなこというなつてフィード！　いやあ、俺は今回のお前の出来事で実に晴れやかな気分だ。見たか、あの騎士団の連中の顔！　俺たちに出し抜かれたのが悔しいのか、自分たちが何もしなかつた自覚があるからか、どれだけ文句言つても何も言い返さないんだぜ。日ごろの鬱憤を晴らすいい機会だ。さまあみやがれ、くそつたれども！」

かなり酔いがまわっているのか、フィードの傍に来たクルスは陽気な様子で語る。

「わかった、わかったからクルス。お前も、もう山のように積み重なっているやつらの仲間入りして来い。いいか、言つておくがその話はこれで五回目だ！」

お前が騎士団に対してもう少し絡みを俺にするんじゃねえ！」

「お前が騎士団に対してもう少し絡みを俺にするんじゃねえ！」

肩に腕をまわすクルスの腕を解き、フイードは文句を囁く。

「お？ そうか、そうか。お前は今日の主賓だもんな。他のやつらに話を聞かせないとけねーよな。おーい、みんな！ フイードが十一支徒を追い払ったときの話を聞かせてくれるってよ…」

その言葉に少ないながらも酒場について、まだ意識のある数名が「おおっ！」と返事をする。おそらく、彼らもクルスが何を言っているかなどもう理解できていないが、とりあえず返事をしただけである。

「本当に、どうしてこうなった……」

その光景を見てフイードは思わず頭を抱えた。そもそも、何故こんなことになつたかといえど。

今朝、フイードたちの元に来た騎士団が事情を聞き、今回の件の手柄を譲つてもらえないかと提案し、それをフイードが承諾したところから始まった。

町長の家で話をしていたフイードはその話をクルスに聞かれ、宿に帰つてグリンに改めて事情を説明していたところ、

『あいつらふざけやがつて！ フイード、今日は飲むぞ！ 下町のやつら呼んでオッサンの酒場に集合だ。金の心配はするな。今日は親父の金庫からかっぱらつてきた金で飲み明かすぞ！』

と嘆いて、仲のよい下町の若者や、酒場の常連をクルスが呼んでも来たせいである。結局フイードも無理やり酒場に連れて行かれ、こうして主賓という体のいい飲みの目的として使われて散々酒を飲ま

されることになった。

とはいっても、フイードはアルコールがほとんど回らない体质なので、他のものが次々と脱落しているのを呆れながら眺めて、ちまちまと一人で酒を飲んでいたのだつた。

「まあまあ。そんな文句ばつかたれんじゃねえよ。いいことじやねえか、下町がこんなに活気に満ちるのは久しぶりなんだぜ」

カウンター越しにレオードがフイードに話しかける。他の客から散々酒を飲ませられたためか、彼の顔も薄っすらと赤みを帯びている。

「いいのか、オッサン。酒場の店主が仕事放つて酒ばっか飲んでて」

「ばかやううー。じうじうもんはな、時と場合によつて臨機応変に対応するのが酒場の店主つてもんだ。今日なんかどうせ仕事にならねえ。片付けはこいつらが起きたあとにやらせればいい。そうなると俺の仕事は客から貰つた酒を飲むだけつことになる」

酔いが回つての冗談なのか、それとも本氣でそう思つてゐるのかわからぬいフイードはただ一言、

「ひでー店主だ。そのうちこの店も潰れるな

と呟くのだった。

一方その頃、グリンの酒場ではアルが帰りの遅い主を待つていた。

「遅いです。夕方には帰つてくるといつてたのに、マスターまた約束を破りましたね。もう夜ですよ。どうせ酔つ払つて寝こけてるに違ひないです。そだとすれば、そろそろ迎えに行かないといけませんね」

と、ぶつぶつと独り言を呟き、その様子をグリンが微笑ましく見守っていた。

「アルちゃん。その台詞もうこの一時間の間で三度田よ。そんなに心配なら様子を見に行くだけ行って来たら？」

グリンとしても今の言葉の後半部分を言うのも 三度田なのでもうこれ以上は言わないと決めているのだが、そんなグリンの言葉にアルは、何故か過剰に反応し、

「いえ！ 別に私はマスターのことが気になつてているわけではありません。そもそもマスターは人様に迷惑かけてばかりいるんです。この前の硬貨袋の件もそうです。緊張感が足りません！」

「いや、それは私が悪かったなんだけどさ」

そう言って、アルのすぐ傍から答えるのは、短めの黒髪に、茶色の瞳をし、アルの服の余りとグリンから貰つたエプロンを身につけている少女、イオだつた。

「そうです！ そもそもあなたがあんなことをしなければ……。といふか何故あなたはそもそも当然のようここにいるのですか…」

アルの糾弾にイオは頬を搔き、苦笑いを浮かべながら、

「いや、だつてね。私にはあんたの主、ファイードに恩が有るし。かと言つて恩を返そつても、あたしには家も働き場所もなかつた。さて、どうしたものかと思つたところを、そこにいるグリンさんが住み込みで働いてみなかつて提案してくれたからさ……」

結果だけいえば、昨夜ファイードが町長に騎士団の要請をしたあと、グリンの宿にゲードを連れてきたことによつてイオは奴隸から解放されたのだ。

『ほり、お前へのプレゼント。煮るなり、焼くなり、刺すなり、ある程度は好きにしろ。ただし殺すなよ。』いつ騎士団に引き渡すんだから』

そう言つてイオの前にファイードはゲードを差し出した。捕縛魔術で抑えられたゲードは今まで散々こき使つてきたイオを田の前にしてひどく怯えた。

『頼む、命だけは。命だけは助けてくれ!』

ゲードを許すつもりはなかつたが、あれだけ威張つっていたものがここまで情けない姿を見せると、今までの仕返しとして凄惨な田に呑わせるのも馬鹿らしくなつてしまい、イオは結局蔑んだ田でゲードを見下し、その鼻つ面に一発だけ思いつき蹴りをかまして、

『さつさと私の烙印の契約を解除しな。……言つておくけどもつあなたの命令は届かないようになつてるからな!』

と脅迫に近い契約解除を申請した。烙印と聞いて一瞬だけゲードの表情に余裕が戻つたが、イオから命令が届かないと宣告され一気に青ざめてしまった。おそらく、烙印に命じて自分を助けるように

命令するつもりだったのだらう。

「のあと、ゲードの契約解除によつてイオの烙印は消え、イオは晴れて自由の身となつた。

それは、他の少年少女たちも同じで、彼らもまた、浮浪児であつたため今後の生活先などは騎士団がバックアップとなり働き場所を提供することを約束したのである。

「は～あ。それにしてもフイードってホントお人よしだよね、こんな金にも得にもならないようなことやつてや」

「なつ！ それはマスターのことを馬鹿にしてるのですか？ まあ、おおむね私も同意見なのであまり言いつ」ともありませんが……」

「いや、でもさ。そのお人よしのところがまたいって言つかさ。あ～ヤバイ。私あの人に寢れちゃったかも」

頬を赤く染めてボソリと呟くイオに、アルは、

「な、な、なつ！ そんな、マスターなんかに惚れてもいいことなんてありませんよ！ お人よしですし、お金にならない仕事ばかりしますし、人のことを平気で数日放つてどこか遠出にでかけますし……」

「じゃあ、なんであんたはフイードと一緒にいるのさ？」

「それは……。私はマスターの奴隸ですし。そう、奴隸！ だからマスターの傍を離れるわけには行かないのです。マスターの傍にいるのは私だけで十分です。他の人の手は借りません！」

「ふつん。あのフィードが奴隸を取るなんて思わないけどなー。どうせ、名田上の奴隸ってだけで命令とか一度もしてないんじゃないの？」

元奴隸で、フィードの奴隸に対しての接し方や、実際に助けてもらった経験からイオはアルの矛盾に斬り込んだ。

「そ、そんなことはないですよ~」

この手のやり取りに慣れていないアルはすぐにボロが出た。といつより、さつきから目がずっと泳いでいた。

「どうだか。まあ、奴隸なら別に主と他の女が何してもよしと文句なんて言わないよね？ だって主に逆らうなんて奴隸じゃないもんね」

クスクスと口元を抑えて笑いを堪えながらイオが呟く。

「それは普通の奴隸と主人の話です！ 私の場合は駄目なマスターに代わって私がしつかりとマスターの面倒を義務があります。それは性悪な女をマスターに近づけないということも含まれます」

「ホント、減らす口の多いやつね。私あんたのこと嫌いだわ」

「奇遇ですね、私もあなたのことが嫌いです」

バチバチと火花を散らせながら視線を交わらせる二人。そんな二人を眺めて、グリンは「あら、フィードさんも罪な男ね」とこの状況を楽しみながら独り言を呟くのだった。

結局一人の言い争いは、その後フィードが宿に帰つてくるまで続くのだった。

夜半の知らせ

『どうしてですか？　どうしてわたしそんなことを言つのですか』

広々とした荒野には青年と一人の女性の姿しかない。何が起こつてもいいように青年が人払いの結界を張り、人を寄せ付けないようにならう。

『わかつてくれ。これがお前にとつて一番いい選択なんだよ』

苦しそうに顔を歪めながら、言葉を吐き出していく青年。だが、女性はその言葉を受け入れるわけにはいかなかつた。

『ずっと、これまでずっとあなたの傍にいました。確かに最初は足手まといで、あなたは口に出しませんでしたが、本当は邪魔な存在だったかもしれません。』

でも、今は魔術も覚えました、剣技も、知識も磨きました。それでも駄目なのですか？　あなたの傍にいてはいけないのでですか？』

女性の悲痛な叫びに青年はただ、黙つて目を逸らすしかなかつた。

女性には決して聞こえないよう青年は呟く。

『だから、駄目なんだよ……。それだけの才能があるから……』

『本当に、駄目……なんですか？』

再三の女性の懇願にも青年は首を振つて拒絶の態度を貫き通した。

『ああ、駄目だ。お前は俺みたいなやつの傍にいちゃ駄目なんだ』
お互いの意見はとうとう妥協点を見つけることなくすれ違つたまま終わつた。

『そう、ですか。なら、わたしと勝負してください。わたしが勝てば、あなたの意見は認めません』

腰に下げていた片手剣を鞘から抜き放ち、女性は青年に向かって構える。手を一切抜かない戦闘態勢に入つた証拠に殺氣が青年の肌を突き刺している。

『ああ、わかつた。だが、俺が勝つたら無理やりにでもお前をフランムへ連れて行く』

そう言つて青年も剣を抜き放ち、女性に向かつて構える。

静寂が場を支配した。お互いに剣を構えたまま、最初の一撃を決めるため、相手の隙を窺つている。両者動かずそのまま時が流れると思われた中、先に動いたのは女性のほうだった。

『ハアアアツ！』

女性は鍛えあげた脚力で一気に青年との距離をつめ、上段から剣を振り下ろした。青年はそれに合わせるように中段から剣を振り抜いた。

『悪い……リーネ』

剣と剣がぶつかり合つた前、青年がそつまくのを彼女は確かに聞いた……。

「あ、ああああああああああああ！」

夢を見ていた。懐かしいというにはまだ早い、苦い思い出の夢。一年ほど前、フラム近くの荒野で『彼』と戦い、そして敗れた苦い記憶。

「なんで、またこんな夢を」

身体をびっしょりと濡らしている汗を室内に置いてあつたタオルで濡らし、ふき取る。ひんやりと冷たい感触が荒れていた心を落ち着けた。

「どうして、今になつて。せつかくこゝ数ヶ月は見ないよつになつたのに……」

今現在自分がいる部屋を見渡してリオーネは呟く。

広い、とこにはそこまでの広さはないが、人一人が暮らす分には、なに不自由しない部屋である。雑務をこなすための机や、休眠を取るためのベッド、そして女性ということから配慮されておかれている浴槽。改めてみてみると十分以上といえるであろう待遇がなされている部屋だつた。

だが、それもリオーネの肩書きであるフラム騎士団第九隊副隊長という身分を考えれば当然のことかもしれない。他国にまでその名聲が届くフラムの騎士団で腕の立つ女、それも副隊長という階級な

のだ。個室が与えられて当然だ。

当然、他の隊も副隊長から個室が与えられるので、格別リオーネが特別なわけではない。

夢見の悪さから、すっかり目が覚めてしまつたりオーネはいつも服装に着替える。それは、本来騎士が着るような軽量の鎧姿ではなく、足にまで届きそうな長めのロングコートにズボンという、騎士であるといつても信じもらえないような服装だった。

しかし、彼女にはその服装で行動することが認められており、実際これまでの功績もこの服装で打ち立ててきた。身体強化魔術が使え、実力のある彼女にとって鎧は逆に自分の行動を遅らせることがある重石でしかないのだ。

彼女のほかにも鎧を使わないでいる騎士団員はいるが、ほとんどものは礼儀として普段は着用している。だが、彼女にとってはこれが長年の経験から身体に染み付いた一番いい戦闘スタイルで、普段着としても使えるため普段からほとんどこの格好で行動している。

少しばかり着いたリオーネだったが、どうにも眠気が覚めてしまつたため、夜風に当たろうと部屋を出て騎士団の宿舎を歩くことにした。

見張りのため巡回する騎士に挨拶を交わし、中庭に辿りつく。冷たい夜風に当たりながら、晴れた夜空を見上げ、煌びやかに輝く星を眺める。

「おや、何んなところで一人で何をしているんですか？」

声をかけられたことに一瞬気づかず、視線を上から声のした先に向けると、そこには柔軟な笑みを浮かべた中年男性が立っていた。

年のせいが、限界まで鍛え上げていた筋肉は少し衰えの兆しを見せ、それでもまだ力強い体格を保っている。暗闇では少し目立つ金色の髪も所々色素が抜け始め白く染まっている。たれている縁眼は人のよさそうな相手だなと思わせる要因の一つだ。

「いえ、少し眠れなくて……。隊長こそどうして？」

隊長と呼ばれるのはリオーネの所属する第九隊隊長グラードのことである。

「僕の場合は少しエルロイドくんと話をしていくましてね。それで今彼の部屋から戻ってきたところなんですよ」

疲れているのか、力なく笑うグラード。鎧を着ていなければ、彼を見て騎士団の一隊長だと思う人より、無駄に身体を鍛えた農夫だと言われて納得する人のほうが多いだろう。

「エルロイドさんと、一体どんな話を？」

「どうせ眠れないのだ。情報を共有する面でも暇を潰すといつ面でも都合がいいと思つたりオーネは問い合わせた。

「いえ、恥ずかしい話なんですが僕の隊の元副隊長。君の前任だった人なんですが、その人がセントールで事件を起こしてしまいました。しかもよりもよつて十一支徒と手を組んで」

十一支徒という単語にズキリと胸の奥が一瞬痛んだ。それは『彼を巡る道標の一つだつたからだ。

（我ながら未練がましいな……）

もう忘れたはずだと思考を切り替えてグラードに話の続きを促す。

「それでですね、事件 자체は向こうの騎士が解決して事なきを得たのですが、元とはいへ我々フーラム騎士団の隊員だったものがそんな犯罪を起こしたとなれば市民の信用は一気になくなってしまいます。もちろん、この話は公表されますが、市民の信用回復、それとセントールの人々の悪印象を払拭するためにも、騎士隊から一隊を選んでセントールへと派遣しようつていう話を持ち出されたんですよ」

「なるほど。では選ばれた隊はセントールに滞在し、人々の助けとなり、失われた信用を回復。そしてフーラムへの印象をよしよしくしようとつのですね」

リオーネの返答にグラードは満面の笑みになった。

「正解です。それで、不始末を起こした元隊員がうちの隊だったといふこともあって、真っ先に僕に話が来たんですよ」

「わかりました。それで、隊長はその話をもつお引き受けになつたのですか？」

「いえ、まだですよ。副隊長である君に話を通しておこうと思いまして。明朝には他の隊にもこの話が伝わると思うので、できれば早めに伝えておきたかったんですよ。いや~起きていってくれて助かりました」

あまりに楽しそうに話すグラードの様子なので、リオーネは不思議に思い、

「なぜ、そんなに楽しそうに話をするのですか？元隊員のしたことはですが、我が隊の信用が一番なくなってしまったのですよ？」

と尋ねた。しかし、グラードはそんなことほまるで気にした様子もなく、

「信用は大変ですけれど、僕たちの頑張り次第で取り戻すことができますよ。そんなことよりもっと重要なことがあるんですよ」

「言つていい意味が分からず、リオーネは首を傾げた。

「これはセントールで噂になっていることなのですがね、実は今回の事件を解決したのは騎士たちではなく一人の青年だという噂が流れているらしいんですよ」

それまで殆ど雑務として淡々と話を聞いていたリオーネの目の色がその一言で変わった。それを見て更に満足そうな笑みを浮かべて話を続けるグラード。

「どうも、その青年はここ数ヶ月セントールに滞在しているみたいで、名前はええと、何だったかな。フ、フリー？」

「フリー……ですか？」

「そうそう、そんな名前だつたかな。いや、たつた一人で十二支徒とフラン騎士団の元副隊長を相手にするなんて、それこそあの『復讐鬼』でもないとできませんよね。」

まあ、噂に色々と尾ひれが付いているのでどこまでが真実なのかはわかりませんが……」

新しい玩具を『えられた子供のようにはしゃぎながら話すグラード。しかし、この時既にリオーネの耳にグラードの言葉は入っていなかつた。彼女の頭にあるのは、ただ今まで分からなかつた『彼の居場所が分かつたということ、そしてそこに自分が行く機会があるということだけだつた。

(『彼』が、こゑ。みひみへ、みひみへ見つけたつー)

心は喜びと怒り、憎しみ。それらが入り混じりドロドロとしたものでかき乱されていた。

「それですね、僕は一応隊長なのでそう軽々とフラムを離れるわけにも行きませんし、いざ派遣するとなると副隊長を中心として派遣することになるのですよ。といつても、この話はまだ僕のところにしか来ていませんけどね。

でも、明日になれば他の隊が派遣の希望を申し入れるかもしれません。自分たちの隊の信用を高めることになりますし、他国へのいい宣伝にもなりますからね。でも、今ならまだ誰も知りません。エルロイドくんも起きているでしょう。

それで、どうします？ 隊長はここを離れられないの副隊長の君に決めてもらおうと思つのですが

聞いかけるグラードに、リオーネは一瞬も迷うことなく答えた。

「はい！ 我が隊が派遣の要請を承ります。元隊員の犯した不始末は我が隊の働きによつて払拭して見せます」

その答えに、グラードは今迄で一番の笑みを浮かべるのだった。

一人の看板娘

下町での騒ぎから早くも一ヶ月の時が過ぎようとしていた。十一支徒の出現と、その撃退。普段は下町の役に立たない騎士団が眞面目に下町の警護に勤しんでいる姿を最初は物珍しげに誰もが見ていたが、一週間も経てばそれが普通だと慣れてしまった。

最初は十一支徒がまだ消えていないのではないかとの緊張感もあり、張り詰めた空気が漂っていたが、それもまた時間の経過と共に少しづつ消えていき、穏やかな毎日がただ過ぎていくだけだった。

それはフイードとアルにも当たることであり、

「アル。今日はちょっと中階層の方に行くけれど、お前も一緒に来るか？」

起床し、着替えを終えたフイードが同じく着替えを終えたアルに問いかけた。

「すみません、マスターのせっかくの誘いなのですが、今日もグリンさんの手伝いをしようと思います。それよりもマスター……仕事はしなくていいのですか？」

事件以後、仕事をしている姿を見ていない自分の主に不安の視線と言葉を投げかけるアル。

「うーん。今は特にしなきゃいけない仕事……というか依頼は来ていないしな。お金もこの間の件で騎士団から口止め料としてもらった分と町長からの依頼達成の報酬がまだ余ってるし」

そう言つてフィードは机の引き出しから硬貨袋を取り出し、アルに見せた。

十一支徒を撃退したのは騎士団といふにして欲しいと頼まれた際、フィードはさもざまな理由からそれを承諾した。しかし、あまりにもあつさりと承諾したため、騎士団側が不審に思つたのか、口止め料として多少の金銭を黙つてフィードの元に送り届けてきたのだ。

とはいゝ、フィードは既に今回の件を親しいものに話しており、クルスなどを通じて下町の人々の耳にも真実は伝わつていたため、口止め料は意味をなさなかつた。

かといって、わざわざ貰つたものを相手に付き返すほどフィードの懐は暖かくなかったため、ありがたくもらつておくことにしたのだった。

それに加えて、町長からきちんととした報酬を貰つたため、今までに比べて少しばかり余裕があるのだ。特にやらなければならぬような依頼もここ最近はなかつたため、下町での些細な出来事の手伝いをしたり、中階層の人々が住む地区に足を伸ばすなどしていた。要するに、ここ最近のフィードは暇をもてあましていたのだ。

対してアルはといふと、グリンの料理を食べにきたという名田で、噂のフィードを見に来たという人々の相手を毎日忙しくしていた。元々お客様であるアルはそこまでして手伝う必要はないのだが、二つの理由から、どれほど忙しくても手伝うことを決めていたのだ。

一つは、宿の主であるグリンが大勢の人の料理を作らなければならず、一人では対応できないと分かっていたため、普段お世話になつてゐるお返しという意味も込めて手伝いをするということ。

そして、もう一つ。実はこっちが本当の意味で手伝いを続ける理由なのであるが……。

「おはよー。 フィード、起きてる？ もう朝食でいいよ」

静かな雰囲気が漂う室内の空氣を打ち壊すかの「」とく、勢いよく部屋の扉が開いた。そして、開いた扉の前には、一ヶ月前から「」の宿で働くことになったアルよりもほんの少しだけ年上の少女の姿があつた。

「おはよう、イオ。相変わらず元氣だな。だけど、ノックもなしにいきなり扉を開けるなよ」

突然のことに特に動搖するわけでも怒るわけでもなく、フィードは半ば呆れながらイオに注意した。

「いや～「」めん、「」めん。でも早く朝食食べて貰いたくて。今日の料理は私も手伝ったんだよ！」

興奮気味に話をするイオ。アルと違い、密ではないイオは朝食の準備や各部屋の掃除などアルがしない仕事もしているのだ。

「そういえば、お前最近グリンさんに料理の仕方とか教わっていたな」

「そうだよ。最近になつてようやく料理の手伝いをさせてもりえるよになつたんだ。といつても、まだ下「」じらえとかしかさせてもらえないけどね」

陽気な笑みを浮かべてイオは答える。その表情は一ヶ月前とは比べ物にならないほど多彩な表情を見せるようになつていた。

一ヶ月前、十一支徒のログと手を組んでいたフランの元騎士団副

隊長であるゲードの奴隸として、浮浪児を捕まえて奴隸とするという目的の陽動として下町の金品を盗み、民家に火をつけるなどといった事件を起こしていたイオはフィードによつて捕まり、その後ゲードの奴隸から解放された。

自分の命を守るため、仕方がなかつたとはいえ、被害を受けたものがそれを許すかといえば話は別だ。償いとしてイオは自分が働いて得られる給金を被害にあつた人に全額渡すということになつた。

奴隸から解放されるまでは、心が追い詰められていたため、表情も暗く、変化も乏しかつたイオだが、フィードに助けられてグリンの元で働くようになつてからは明るい表情が増えていった。彼女と仲の悪いアルも、同じ経験があるため、そのことについてはよかつたと思っていた。

明るい表情が増えた理由がフィードになれば……。

「へえ。でも頑張ってるじゃないか。そのうちイオが厨房を任せられて料理を出すなんてことになるかもしねないな」

「まあ、そうなるのが理想だけど。やつぱり一から始めたことだから下駄じらえでも大変で」

謙遜するイオにフィードは優しく云える。

「いや、それだけ一生懸命になれるならすぐにつまくなるさ。これからも頑張れよ」

褒め言葉と共にイオの頭を撫でるフィード。頬を搔き、照れながらもイオは黙つてフィードに撫でられていた。

そんな微笑ましい空気の一人を見て、不機嫌になつてゐる人物が一人いた。

「むむむむ」

二人の隣でその様子を見ていたアルだ。湧き上がる嫉妬と羨望。ここ最近あまりフィードに褒められていないアルは、頭を撫でられているイオが腹立たしくもあり、同時に羨ましくもあつた。しかし、それを態度に出そうとはしなかつた。態度に出すことでフィードに子供だと思われたくなかつたのである。

そんなアルの様子に気が付いたのか、イオはニヤリと勝ち誇った笑みを浮かべ、アルを挑発する。

(なんですか、その笑みは。マスターに褒められたからって調子に乗つて……。私だって、頑張ったときは褒めてもらつてるんです。その程度の挑発はなんとも思いません)

挑発に乗らないアルを見たイオは、その態度が気に入らなかつたのか、次の手に移つた。

「フィード。くすぐつたいよ」

それまで何も言わずにただ撫でられていたイオがフィードに訴える。

「ん？ 悪い、悪い。嫌だつたか」

とつさに手を離したフィード。離すことまで予想していなかつたイオは名残惜しげにその手を眺めていた。

「ううん、嫌じゃないよ。フィードがよければだけど、私が頑張つてゐなと思ったときでいいから、またこうして褒めてくれる？」

上田遣いで懇願するイオ。特に断る理由もなかつたフィードは、

「こんなのでよければこいつだつてしてやるぞ」

と、そのお願ひを承諾した。その返事を聞いたイオは小さく手を握り締めていた。そして、またもやアルの方を向き、血運げにしていた。

これに小さなアルも腹が立つたのか、

「マスター、早く朝食を食べに行きますよ！ 早くしないとせっかくの朝食が冷めてしましますから」

とフィードの手を引いて部屋を出て行つた。

「おい、アル。お前なに怒つてるんだよ……」

頑張つてゐる子供を褒めたという程度のことしか思つていなければ、何故アルが怒つてゐるのか分からず、ただ必死に自分を引っ張る少女に合わせて部屋を出るしかなかつた。

「あんたは今日もこじで手伝いをするの？」

そんな二人の後に続いて歩くイオは前を歩くアルに尋ねる。

「ええ。誰かに手伝いを任せるとグリンさんが大変そうだと想つので」

「そりゃなの？　お客なんだから手伝いなんかしてなくていいのに」
フィードを挟んで火花を散らす一人。アルがグリンを手伝つむづ
一つの理由がこれである。

イオがフィードに好意を持つているということをアルは既に知つ
ていた。そんな彼女がアルと同じように働き出し、先程のようにフ
ィードに褒められるようになつた。

色々と背伸びをしていても、まだまだ子供なアルは、自分の居場
所を取られると思い、イオに対抗して今まで以上にグリンの手伝い
をすることにしたのだ。

それは自分がフィードに褒めてもらいたいということもあるが、
イオに負けたくないといつ気持ちから張り合つてているのだった。

イオとアルの二人は知る由もないのだが、一人が張り合ひ、きつ
ちりと仕事をこなしているため、フィードを見に来た客の一部が彼
女たちの働く姿に惚れ、その姿を見にこよひと食事を取りに来るよ
うになつていた。

こうして、二人は知らぬ間に宿の料理を食べに来る常連客を増や
し、看板娘としての地位を着々と築いていたのであった。

かつての少女と今の少女

朝食を食べ終わったフィードは、宿を出て中階層の住人が住む地区に向かっていた。中階層に向かう際、見知った顔の下町の住人に声をかけられ、雑談を交わしたりもした。

彼らの話す内容はほとんど同じもので、今下町の警護をしている騎士隊の代わりに、フラムから騎士隊が派遣され、しばらくの間下町の警護に付くというものだった。

剣の国と呼ばれるフラムは、騎士の発祥の地でもある。そのため、セントールのような騎士団と違い、眞の意味での騎士道精神に溢れる騎士によつて騎士団が成り立つている。

その噂は本国にとどまらず他国にまで名声が響くほどであり、騎士団員の高潔さや慈悲深さ、民衆に対して分け隔てなく接するその態度には、彼らに守られる民衆の中から騎士団を崇拜する者も出てくるほどのものだそうだ。

そんな本場の騎士隊が来るとあつては下町の人々だけではなく、中階層や上階層の人々までも噂を聞いて、浮き足立つっていた。

噂によるとフラムから派遣される騎士を率いるのは騎士団第九隊副隊長のリオーネという女性騎士だと言つ。この一年で急に現れた彼女は、短期間の間にさまざまな事件を解決したり、民衆への態度やその実力からあつといつ間に副隊長へと昇進した女性だ。

まさに時の人。そんな人物をお目にかかるとあつては誰もが彼女が訪れるのを待ちにし、そわそわと落ち着きのない様子なのも納得がいく。浮き足立つのも仕方がないだろう。

ただ一人、フィードを除いて。

これは誰にも言つていかないのだが、一年前、とある事情からそれまで一緒に旅をしていたリオーネをフラムへ置き去りにしたフィードとしては、今回の出来事はあまり歓迎するべきものではなかつた。もちろんそれはフィードがリオーネと知り合いだということがバレて面倒な事態になるのもあるのだが、まず第一に彼女に対する罪悪感から彼女に会う事を避けていた。

（もしリーネに会つたら、まず最初に俺を怒鳴りつけてきて、次に剣で刺してくるんだろうな……）

恨まれるようなことをしたのだから、そのような行動を取られても仕方がないと内心で諦める。下町にいる以上、どちらにしてもリオーネと顔を合わせることになるのだ。例え気配を消しても、リオーネならフィードを見つけることなど造作もない。

（余つたら絶対に嫌な空氣になるだらうし、それにアルのこともあらうしな……）

今現在自分と一緒にいる少女のことを思い浮かべてフィードは頭を抱えた。自分のこともそうなのだが、下手をするとアルにまで怒りの矛先が飛び火する可能性があるのだ。

それは、今朝アルが思つていた『自分の居場所』というものが関係していく。

（リーネにとつて家族は俺一人みたいなもんだつたしな。今はきっと騎士団の連中と上手くやつてると思うからもう違うんだろうけど）

リオーネにしてみれば、今のアルはかつて自分がいたはずの場所に割り込んできた無粋な相手と思われても仕方がない。もちろんフィードはそんな風にしたくてアルを引き取り、一緒に過ごしている

わけではないのだが、フィードがそう思つてゐるからといって、リオーネもそのように思つわけではないのだ。

考え方には耽つていて気が付かなかつたが、いつの間にかフィードは下町の地区を超えて中階層の地区に足を踏み入れていた。そのことに気が付いたフィードは、考えるのを止め、辺りを見渡した。下町に比べ、一つ辺りの面積や敷地の広い家屋。清潔さや高級感が漂い、下町にはないような少し割高な工芸品やアクセサリーといった店が軒並み並んでいる。

通りを歩く人々の表情はどれも明るく、身につけている衣服も、使い込まれて色が落ちた下町のものと違い、綺麗で色とりどりのものが多い。

「やあ、やこのお兄さん。ちょっとうちの店の商品見ていかないか？」

？」

男勝りな喋り方をする女性店員が、店の前からフィードに声をかけた。見るとその店は女性向けのアクセサリー店で、男一人が入るには少々敷居の高いところであった。

「わざわざ声をかけてくれて悪いんだけど、俺はこういったアクセサリーに縁がない男だよ」

断りを入れて、そのまま先へ進もうとしたフィードだったが、女性店員は店にフィードを引き込みたいのか、わざわざ前に立ちふさがり、進行方向を防いでまで話を続けた。

「いやいや。お兄さんはこういったものを好まないかも知れないけど、お兄さんの周りの女の子へのプレゼントとしてはどうかな？意中の女性とかいるんじゃないの？」

そう問い合わせられるが、フィードには意中の相手は一人もいない。気にかけている女性は数人いるが、いずれも保護者の立場から気になっているだけである。

(そういうえば、最近アルなんにもしてやれていらないな。あいつこそ最近グリンさんの手伝いで忙しそうだし……)

ふと脳裏に浮かんだのは今朝も忙しそうに料理を運んでいた少女の姿だった。一緒に朝食を食べた後、すぐさま仕事の手伝いを始めたアルはどんどんと増えていく客の対応にてんてこまいだった。アルとは違い、食事を終えてもやることがなかつたフィードはそんな一生懸命に働くアルの姿を見て心穏やかな気分になっていたのだが、じつと見られていたことに気が付いたアルに、

『そんなにじつと見られると、仕事に集中できなくなります。食事が終わつたのなら早く出てつてください!』

と言われて宿から追い出されてしまった。アルからすればフィードに自分の働いている姿を見られるのが恥ずかしかつたのだろう。

「あれへ。黙つたつてことは少なくとも気になつてる人はいるんだ。うん、いいね。そんなお兄さんについて商品があるんだよ。ほら、付いてきて!」

少々強引にフィードの手を掴んで店の中へと連れて行く女性。その一生懸命な姿に今頃同じように頑張っている働いている少女の姿を重ねたフィードは、無理やりその手を振りほどく気になれなかつた。

「お父さん、お姉さん確保したよー。」

店内に入り、店番をしていた父親に嬉しそうに報告する女性。フイードと娘の一部始終を見ていたのだろう、少し申し訳なさそうに頭を下げる。

別にまだ商品を買うと決まったわけではないので、頭を下げられるところ困るのだが、フイードもつに相手に頭を下げ返してしまつ。だが、嫌な気分にならないのはきっとフイードもこの父親のような気持ちで常日頃過ごしているからだろう。

お互に苦労しますねという意味を込めてフイードはもう一度頭を軽く下げる。

「ま、お兄さん。女の子はたとえ安物でも心のこもったプレゼントをもらえると嬉しいんだから、真剣に選んであげてね」

少女の中ではフイードが商品を買いつづけ前提で話が進んでいるようだ。そんな少女の様子にフイードは仕方がないなと思いつつも、ちゅうどいい機会だと思い、毎日仕事の手伝いを頑張っているアルへのプレゼントを選ぶことにしたのだった。

「アルちゃん、そろそろ休憩にしようか

朝食を食べに来たお客様の波が緩やかになり、店内の雰囲気も落ち着きだした頃、グリンはアルにそう伝えた。

「えつ……でもまだお客様いますよ~。」

アルの言つとおり、少なくなつたとはいえたが、まだ店内には数名の客がいた。アルが抜けても対処しきれないことはないが、今から数時間もしないうちに昼食を食べにくるお客様がまた来るのだ。そうなつたとき、もしアルがその場にいなかつたらきっと手が足りなくなるだろ。

「いや、いいんだよ。最近忙しかつたせいか私も疲れていてね。今日の昼食はなしつてことにしたの。泊まっているお客様さんに出すのは朝と夕方の一回の食事だけだし、元々昼食も時間が余つていたからやつっていたものだしね。

それなのに最近はフイードさんやアルちゃんといօちゃんを担当にくるお客様さんで一杯で時間に余裕もなくなつちやうわ、食材も人の手も足りないで困つたものよ」

頬に手を当て、ハアと思いため息を吐くグリン。よく見ればグリンの顔には深いクマができており、顔も少し青くなつていた。

「グリンさん。もしかして体調悪いんじゃないんですか？」

アルの問いかけに力なく微笑むグリン。それを見てアルは胸が痛んだ。ここ最近のグリンは働き尽くめで休む暇もなかつたのだ。そのことに今更気が付き、アルは申し訳なくなる。

「わ、私ちょっと何か買つてきますー！」

休憩を言い渡されていたアルはちゅうじいこと思い、着ていたエプロンを外すと、急いで一階の厨房へと駆け上がつた。

「あれ？ どしたの、そんなに急いで」

途中、各部屋の掃除を終えて下に降りようとしていたイオとすれ違つ。グリンのこともあるので、アルは意地を張らずに返事をした。

「あの、イオ…… ゃん。グリンさんが体調悪いみたいなので、ちょっと様子見てもらつていてもいいですか？ 私、疲れを取るのに効きそうなものを買つてくるので……」

普段呼ばることのない名前を言われたためか、イオが驚いた表情のまま固まつていたが、真剣なアルの様子を見て、今はふざける時ではないと悟つた。

「了解。お客さんの相手とかできるだけ私がやつておくよ。グリンさんも無理しないように様子見ておく。雇い主に倒れられちゃ私も困るしね」

舌を出し、おどけながらアルに手を振り、イオは一階へと降りていった。

部屋に戻つたアルは上着を羽織り、机の引き出しに仕舞われる予備の硬貨袋を取り出し、そのまま一階へと勢いよく降りて行つた。そのまま外へ出る。

外に出たアルはまず下町の薬屋へと向かつた。すれ違う人々に時折ぶつかりながらも、グリンのために必死に走つた。

「おや、グリンさんのところのお嬢さん。いらっしゃい、何か必要かい？」

息を切らしながら店内に入ってきたアルに少々面食らつていた店主だが、落ち着いた態度でアルに話しかけた。

「あ、あの！ 疲れとかによく効く薬つてありますか？」

アルの注文に、店主は少しだけ困った顔をした。

「一応メディカルハーブつていつのがあるよ。これを使えば疲労回復にもなるし、健康の維持にもなるよ」

「それ！ それ貰えますか！？」

「いいけど、お金はあるかい？ 実はこれかなり値が張るものなんだよ。うちでも一応取り扱ってはいるけれど本来は中階層や上階層の人人が買つようなものだから……。今もつているお金を見せてもらつてもいいかな？」

店主にそう言われ、アルは持っているお金を差し出して見せた。

「うーん、これじゃあ全然足りないな。ツケにしてあげるつてこともできるけど額が額だからな……」

フイードがいれば今この場で支払うこともできただらうが、生憎と今はアルしかいない。お金が足りないといつ事態を予想していかつただけに、アルは困り果ててしまつ。

（どうしましよう……。せっかく疲れが取れる薬が見つかったのに、お金が足りません……。マスターがいてくれたら薬も買つことができるのに、もう、大事なときになんでいつもマスターはいないんですか！）

お金がないのに店内に居座るわけにもいかず、アルは肩を落とし

て店を出た。やり場のない怒りを持て余し、舌を向いて歩いていると、アルの対向から歩いてきた一人の女性とぶつかってしまった。

「「めんなさい、大丈夫？」

ロングコートにズボンを履いた女性が、俯くアルに声をかける。顔を上げるとそこには心配そうにアルを見つめる女性の姿が会った。背が高く、それでいてすらりとした体格。一見すると痩せて見えるその体格は鍛えられた筋肉によって引き締まっているようだ。アルにはない膨らんだ二つの双丘がその体格に合っていて、女性の魅力をより一層引き出していた。

肩よりも少し長く伸びた金髪は後ろで一括りにまとめられており、透き通った青色の瞳は見つめられると引き込まれてしまいそうだつた。

こんな綺麗な人がいるんだなとアルが思つていると、返事のないアルをますます心配したのか、

「もしかして、どこか悪いの？」

と先ほどよりも優しい声色でアルの様子を伺つた。女性はあると同じ目線で話すためにしゃがみこみ、アルが話をしてくれるのをじつと待つっていた。

「いえ、私は別に悪いところはないんです。ただ、日暮のお世話になつている人が体調が悪いみたいで……。そこの薬屋さんに薬を買ひにいったんですけど、お金が足りないって言われて……」

女性に説明をしている間もますます落ち込んでいくアル。事情を聞いた女性は少し考えるそぶりを見せ、

「さう、お世話になつてゐる人のために……。わかつた、少し待つていて」

そうアルに言つなり、女性は今アルが出てきた薬屋の中に入つていつた。女性に言われたとおり、しばらくなつての場で待つてゐると、

「はい、これ持つていいって」

薬屋から出てきた女性が持つていた紙袋をアルへと手渡した。

「えつ！？ これ……」

紙袋の封を開けると、そこには調合されたであろうハーブの粉末が入つっていた。それも結構な量で。

「それを飲むと身体の疲れとかよくなるみたい。量も結構あるから、一度で全部使うんじゃなくて、体調が悪くなつた時に少しづつ使うといいわよ」

それだけ言つてその場を立ち去りはじめる女性を、アルは慌てて引き止めた。

「ま、待つてください！ そんな、これを貰つわけにはいきません！」

見ず知らずの、それも今会つたばかりの女性にお金を出してもらつて、タダで目的のものを手に入れることになつてしまつた。何故そんなことをしてくれるのか、全く理由が思い当たらないアルは素直にこれを受け取るわけにもいかず、女性に紙袋を返さうとする。

「そう言われても、それはもう買ったものだから店に返すなんてできないわよ？それに、私が買ったものだから、それをどうしようと……例えばこれを必要としているけど、お金がなくて困っている女の子にあげても私の勝手つてことになるわよね？」

あまりにも身勝手で、お節介で、それでいてものすごくお人好しなその女性の姿にデジヤブを感じながらも、納得のいかないアルはその場で頭を悩ませてしまった。

（どうしましょう。きっとこの人はお金持ちかなにかで、きまぐれで買ってくれたのかもしないです。例えそういうた理由で渡してくれたとしても、何もしていらない私がこれを受け取るわけには行きません。ですが、今これが必要なのも確かですし……）

悩み続けるアルの姿を見て、女性はクスリと微笑んだ。

「真面目な子なのね。もしかして理由が欲しいの？ それなら……自分のためじゃなくお世話になつてている相手に対しても死になつている姿に心打たれたつてことじやだめかしら？」

アルの頭に手を置いて、同じ田線になつて話をする女性は優しい笑みを浮かべて、アルが必要としていた『理由』を与えた。断る理由をなくしてしまったアルは素直に受け取るしかなくなつてしまい、女性が渡してくれた紙袋をギュッと大事に抱きかかえた。

「そう、それでいいの。人の好意は素直に受け取つておくのが一番。あなたみたいな子供は特にね……。変に意地を張つたり反抗していると大人になつたときに後悔するわよ」

田頃子ども扱いされるのを嫌つてているアルだが、この女性から子

供と言われても腹が立つことはなかった。それどころか、子ども扱いされて嬉しいと感じてしまっている部分がある。

(不思議です。他の人ならされて嫌なことも、この人にされても嫌じゃないと思えてしまいます)

頭を撫でられる」とも、子供に扱われることも嫌と感じない。言ひ知れぬこやばゆさと恥ずかしさからアルは顔を真っ赤に染めてしまつ。

「ふふふ。それじゃ、そろそろ私も用事があるし、お別れね。それじゃあな」

そう言つて再び立ち去りうとする女性。

「あの！ 薬ありがとうございます。私、アルつていいます。この薬のお礼がしたいので、もしよかつたらまた会つてもらえませんか！？」

普段よりもはるかに大きな声でアルはお礼の言葉を告げる。その言葉に女性は面食らつていた。そんなことを言われるとは思つていなかつたのだろう。

「本当にいい子ね。あなたを育ててくれている人に一度会つてみたいわ。そうね、それじゃあ明日の同じ時間なら予定が空いているから、もしあなたの都合もいいような、また会いましょう。またね、アルちゃん」

と、再び先へと進もうとしたところで、ふと忘れていたものを思い出したのか、女性はアルの方に顔だけを向けて、

「そう言えばまだ私の名前を言つていなかつたわね。私の名前はね、リオーネって言ひの。しばらくの間はこの下町に滞在することになると思うから、よろしくね」

リオーネはアルにそつ伝えると今度こそ振り返ることなく先へと歩いていった。

一人取り残されたアルは、今聞いた名前を頭の中で何度も呟いていた。

(リオーネ、リオーネ。もしかして、その人が噂になつてゐる騎士隊の副隊長さんなんでしょうか？ もしそうならさつそく助けてもらいました)

これが、まだ他の騎士が下町に辿りついていない中、ただ一人別の目的を持つて一足先に下町へと訪れたリオーネとアルの最初の出会いだつた。

迫り来る時

フィードが宿に戻ると食事場の椅子に腰掛け、青い顔をしているグリンがいた。

「ただいま、グリンさん。顔真っ青ですよ。大丈夫ですか？」

しゃがみこみ、グリンの容態を確認するフィード。心配そうにグリンの様子を伺うフィードに、グリンは力なく微笑み、

「ああ、大丈夫だよ。アルちゃんとイオちゃんにも同じように心配してもらつてね。アルちゃんは高いのに薬まで買ってきもらつて、今それを飲んで休んだところなのわ」

事情を説明するグリン。それを聞いてフィードはひとまず安心した。

「わかりました。でも、無理はしないでくださいね。なにが必要なものがあれば俺が買いに行つてきますから」

「そうね、その時はお願ひするわ。『めんなさいね、お姫さん』こんな気を使つてもらつて……」

「何を言つているんですか。俺やアルはいつもグリンさんのお世話になつてるんです。もうただのお客と店主の間柄つてわけでもないですよ。それと、同じ事をアルには言わないであげてくださいね。本人はきっと否定しますけど、アルのやつはグリンさんことを家族みたいだと思つてます。きっとさつきみたいに言われると、寝る前にベッドでひつそりと泣いちゃいますから」

口元に人差し指を突き立て、少しおどけながら内緒話をするフィード。そんなフィードを見てグリンは苦笑する。

「そこまで頼まれちゃしょうがないね。アルちゃんにはお礼を言つだけにしておくわ。フィードさんもありがとうね。私はあと少しここで休んだら部屋に戻るわ。もう大丈夫だからアルちゃんの所へ行つてあげて。手に持つている、それ。アルちゃんに渡すんでしょ？」

グリンはフィードの手にある小さな紙袋に目を向ける。そこには少し前にフィードが中階層で買つてきたアルへのプレゼントが入つていた。

「ええ。少し前は俺が、最近はあいつが忙しくしてたせいで、あまりかまつてやれなかつたんで、そのお詫びと田頃のお礼ということ。まあ、たいした物じやないんですけど……」

「そんな事言つちやだめよ。プレゼントつていつのは貰えるだけで嬉しいんだから」

「それ、これを貰つた店の店員も言つていたな……」

「ふふふ。鈍感のかわさとやうしてているのかは知らないけれど、そう言つた気遣いはきちんとしておかないと、後で大変になるのはフィードさんよ」

そう言つてグリンは立ち上がり、自室に向かつて歩いて行つた。フィードは付き添おうと思つたが、心配から過度に干渉するのも迷惑になると感じ、その背を見送るだけにした。

「フィード、お帰りなさい。こつの間に帰ってきたの？」

グリンと入れ替わりに厨房の奥からイオがひょっこりと現れた。

「ただいま、イオ。帰ってきたのはつにせつさだよ。あ、そつだ。グリンさんが今部屋に戻ったから、後で様子を見に行つてあげてくれないか？ かなり体調が悪そつだつたみたいだから」

「わかつた。それじゃあ、もつ少ししたら様子を見に行くね」

「よろしく頼むよ」

グリンの件を伝えると、フィードはイオと別れて一階の浴室へと向かつた。階段を上ると、簞を持つて廊下の塵やゴミを掃くアルの姿があつた。下を向いているため、階段を上つてきたフィードの姿にまだ気がついていない。

フィードはそつとアルに近づき、

「よつ！ 頑張つてゐな、アル。感心、感心」

と階中越しに声をかけた。当然、突然声をかけられたアルは、身体をビクンと震わせて驚いた。

「ふえつ！ ま、ますたー！？ あれ？ こつからそいつこいたんですか？」

動搖しているのか、あたふたしながらアルはフィードに尋ねる。

「まさに今せつせつ。それよりもグリンさんの様子見たよ。かなり疲れが溜まつてゐるみたいだな」

「はい。じじいばりばり忙しくて休む暇もありませんでしたし、もつと早く氣づけたら良かつたんですけど……」

肩を落として、落ち込むアル。だが、フィードはそんなアルを見て笑っていた。アルが身近な人の心配を素直にできるようになってくれたことが嬉しかったのだ。

「まあ、それはしようがないよ。俺も気づけなかつたし、アルもそんなんに気にするな。それよりも、後で様子を見に行くついでに温かい食べ物でも作つて持つていってあげようか。アルもグリンさんに料理を教わってるだろ？ 簡単なものなら作れるんじゃないのか？」

フィードの提案にアルは「ククク」と頭を振つて頷いた。

「よし。それじゃあ、あとで一緒にグリンさんのお見舞いに行こうな。つと、そうだ。忘れるところだつた」

と、そこまで話しあえてフィードは本来の目的を思い出した。手にしていたプレゼントの入つた紙袋をアルの前に差し出す。

「……？ マスター、これはなんですか？」

そのアルはとこつと訝しみながら紙袋を眺めていた。アルにはフィードが自分にプレゼントを贈るという考えが浮かばなかつたらしい。フィードは受け取られることなくアルと自分の間で留まる紙袋を再び自分の元へと引き戻し、その中に入っている中身を取り出した。

「えつと、な。これは、なんというか……。そう、お前へのプレゼ

ントだ

無垢な眼差しで自分を見つめるアルに、素直に田頃のお礼としてのプレゼントと黙って渡す事が照れくさくなってしまったフィードは、口ごもりながらもその中身をアルへと手渡した。袋の中に入っていたのは女物の赤色の小さな髪留めである。髪留めの根のところには一枚の花びらが細工されており、その「デザインは可愛らしく、まさに少女向け」というものであった。

そして、アルはとくと、フィードから贈られたプレゼントを受け取ったものの、今日の前で起じたことに頭がまだついておらず、ボーッと惚けたままプレゼントとフィードへ視線を交互に移していた。

「あの……。いいんですか？」

既に今日同じようにリオーネから無償の施しを受けているアルはつい遠慮がちになってしまっていた。フィードはリオーネと違つて見ず知らずの相手でないのだが、それでも親切にしてもらつだけで、自分が何も返す事ができないのは気が引けてしまうのだろう。

「どうした。もしかして、迷惑だつたか？」

もつと喜ぶ顔が見られると思つていたフィードは感動の薄いアルを見て、少し気落ちしてしまつていた。それにアルも気がついたのか、慌てて自分の今の態度の弁解をする。

「いえ！ けして嬉しくないわけじゃないんです。マスターからのプレゼントなんです。嬉しいに決まつてます。そりやあ、できれば事前に一緒に買つ物を見に行けたらな……なんて思つたりしましたけど」

言っている途中で恥ずかしくなったのか、アルの言葉は次第に小さくなってしまった。フィードも聞いていて恥ずかしくなったのか、視線を逸らし、

「うん。まあ、喜んでもらえたなら良かつた」

と返事をした。それから、しばらく一人の間には沈黙が漂つ。しかし、何故か居心地は悪くない。

（あ～。なんだこの生暖かい雰囲気は。くそ、予定ではこんな風になるはずじゃなかつたのに。アルにプレゼントを渡して、喜ぶ顔を見てそれで終わりだつたはずだ！　それがどうしてこうなつた……）

予想外の事態に困惑するフィードだが、それもアルの一言によつてどうにか意識を逸らす事ができた。

「マスター。よければこれを付けてもらつてもいいですか？」

田の前に差し出されるのは今渡した髪留めだった。

「いいぞ。それじゃあ、ちょっと頭動かさないでいてくれるか」

受け取つた髪留めを手に取り、フィードはアルの髪を留めるために身長差を埋めるためにその場にかがむ。さらりとしたアルの白髪に手をかけて、髪を搔き分け、髪留めを差し込む。瞳と同じ色をした髪留めは、アルの白髪と相まって更にその存在を際立たせていた。よし、とフィードが一安心し、視線をアルに移すとその顔は思つていたよりもずっと近くにあつた。互いの吐息が感じられるくらい近い距離。

アルは熱の籠つた瞳でファイードを見つめていた。

「えと、マスター……」

とアルが口を開き、何かをファイードに伝えようとした時、

「あー！ ちよっと、ファイード。それなんなのー？」

階段を上つてきたイオが一人を見て叫び声をあげた。

「なにって……髪留めだけビ？」

「やうだけど、私の分は……？」

アルが付けている髪留めを見て羨ましそうにするイオ。ファイードはイオのそんな表情を見て、ほんの少し胸を痛めた。

(でも、これはな。元々アルへのプレゼントとして買ったわけだ、イオが欲しいと言つたからって、買ってやつちやうとアルの奴が怒りそつだからな)

さすがに、ファイードでもその程度の女心はわかるのか、アルとイオとを見比べて、

「悪いな、イオ。今回のはアルだけしかないんだ。アルも頑張つたしな。お前がこれからも頑張つているようなら、その時はお前にも買つてきてやるから。だから、今回は我慢してくれ

とイオに告げた。イオは悔しそうにしていたが、ファイードの言ひ事に納得したのか、アルを一警した後、

「絶対だよ！ 絶対私も買つてもいいんだからー。」

と言ひて逃げるよつて再び一階へと降りて行つた。

そんな慌ただしく動き回るイオにフイードは苦笑し。アルは、フイードが見ていないところで勝利の味を噛み締めて身を震わせていた。

「それじゃあ、そろそろ部屋に入るかな。アルも掃除頑張れよ。」

激励の言葉をかけて部屋に戻ろうとするフイード。アルの横を通り過ぎ、自室の扉に手をかけようとした時、アルが伝えそびれたことを思い出し、フイードに声をかけた。

「あ、そういうばマスター。実は今日グリンさんの薬を買いに行つたんですけど、持っていたお金が足りなくて薬が買えなかつたんですよ。でも、ある人が代わりにその薬を買つてくれて、しかもお金を要求しないで私にくれたんです。」

アルに声をかけられたフイードは扉に手をかけたまま顔だけ振り向き、話を聞いた。

「へえ。それはまた親切というか、なんというか。まあ、いい人がいたものだな。でも、いくら何でもタダでものを受け取るだけっていうのも良くないと思うから、またお礼の品か何か持つてその人のところにいかないとな。」

アルは、その人の名前とか聞いたか？」

不思議な事もあるものだとフイードは軽く考えていたのだが、次

にアルから発せられた相手の名前を聞いてその表情は凍り付く事になつた。

「はい！ それが聞いてくださいよマスター。その薬をタダでくれた人はリオーネさんつていうんです。今度この下町に来る騎士隊の副隊長さんなんですよ！ なんとかまだ他の人たちが来てない中で一人で来ていたみたいですけど、あんなに綺麗でいい人が世の中にいるんですね……」

その時のことと思い出しているのか、アルはうつとりとした表情で惚けていた。人見知りのアルにしては珍しく、親切にしてもらつた事もあつてリオーネのことを気に入つたのだらう。

しかし、そんなアルとは対照的に、リオーネの名前がアルの口から出た事で、フィードの背筋は寒くなつていた。

（ちょっと待て。いつの間にアルの奴リーネに会つてたんだ？ 幸いリーネの奴もアルの素性については気づいていないから、こんなにアルが楽しそうに話しているんだろうけど……）

二人の出逢いを不安に思うフィードの様子にアルは気がつかないのか、そのまま話を続ける。

「実は、リオーネさんにお礼をする事も含めてまた明日会う事になつたんですよ。それで、マスターにも一緒に来てもらいたいんですけど……」

（逃げることはできないことかもな……）

はしゃぐアルを見つめながら、フィードはリオーネとの再会の時

が迫っている事を自覚した。

夜も更け、人通りを歩く人の姿がほとんどなくなつた通りを歩く一人の女性の姿が会つた。金髪の髪をたなびかせ、通りを歩く数少ない人の目を引くのはリオーネだつた。

いつも通りのラフな格好で歩く彼女を騎士団の副隊長などと思う人はいないだろう。なにせ噂の女性副隊長はその功績や人柄ばかりが町の人々の耳に入つており、その容姿はあまり知られていないからだ。

まして、今はまだ彼女を除いた騎士団員は誰も到着していないのだ。下町の人々が彼女を騎士団の一員ではなく、見慣れない美しい旅人と思つてしまつても不思議ではない。

セントールを訪ねたりオーネだが、宿は取れたものの食事がついていなかつたので、近くにある酒場に食事を足りに來ていた。

酒場に入ると、食事を食べたり、酒を飲んでいる人々の視線が一斉にリオーネの元に集まつた。じつと観察するようにリオーネを見つめる彼らの視線に、リオーネが視線を投げ返すと、誰もが目を逸らし、下を向いてしまつた。

（なるほど……下町の人々は、見慣れない人に対する警戒心が強いのですね。亡益国と呼ばれるだけあって、どんな人間が紛れるか分からないですし、警戒心を抱くのもわかります。隊のメンバーが来たらこの事を伝えてなるべく早く下町の住人の信頼を得られるようにするように言いつけておきましょう）

仕事中でないにも関わらず、リオーネは騎士団が早く下町に馴染めるようにする方法を考えていた。仕事熱心というより、仕事に対

して眞面目な彼女らしい考え方である。

しかし、リオーネは気づかなかつたが、酒場にいた客がリオーネから視線を外した理由には、たしかに見慣れない人物に対しての警戒心もあつたのだが、それ以上に美しい容姿の彼女と視線を合わせるのが恥ずかしいという理由の方が大きかつた。

「いらっしゃい。先に行つておくがお嬢さん、ここはあんたみたいな女性が来るような店ぢやないぞ。文字通り女に飢えたむさ苦しい男共しか集まつてない。酔つた連中に絡まれる前に早く帰りな」

木製のグラスに他の客の酒を注ぎながら、気を利かせたレオーデがリオーネに忠告する。他の客達は、その言葉に不満があるのか、野次や罵詈雑言をレオーデに投げかける。

しかし、リオーネはについつと微笑みながらその忠告を断つた。

「いえ、気を利かせていただいたようですが、私にはこのよだな店が合つています。昔からこういった店にはよく来ていましたから」「……そうかい。まあ、あんたがいいといつのなら、俺は別に構わん。それで、注文は？」

「おすすめのメニューは何があるんですか？」

「つけのおすすめかい？ そうなるとハートパイと蜂蜜酒になるが

……

「では、それでお願いします」

注文を頼まれたレオーデはすぐに料理を作り始めた。その間、手持ち無沙汰なリオーネは酒場にいる客をぐるりと見回した。

「ここにいる人々の顔に浮かんでるのはどれも笑顔。不平不満を口にしながらも、明るい表情が絶えていない。

（リオーネはいい雰囲気の酒場ですね。しばらくはここで食事をとることにしましょうか）

まだ食事が来ていないにも関わらず、リオーネは店の雰囲気だけで下町での食事場を決めてしまった。

そんなとき、店内を見回していたリオーネと視線の合った一人の若い男性が、席を立ち、カウンター席の方へと歩いてきて、空いているリオーネの隣の席に座った。

「やあ、姉ちゃん。見かけない顔だけど、観光できたのか？」

男の吐き出す息は酒臭く、顔は赤らんでいる。見るからに酔っぱらっている事が分かつた。しかし、そんな男の相手をするのは別段珍しくないリオーネはそのまま相手に応対した。

「観光ではないですね。ですが、しばらくの間この下町に滞在する予定です」

リオーネの答えを聞いた男は口笛を吹き、少し直情的な目でリオーネの胸元を見ながら言つた。

「へえ。それじゃあ、暇があつたら俺と一緒に観光しないか？　俺はこの町に住んで長いし、色々と案内できると思うぜ」

男の視線に気づきながら、リオーネはそのまま話を続ける。

「いいですよ。でも条件が一つあります。私と戦つて参つたと言わ

せることです。それができるなら何でも言つ事を聞いてあげます」

その返答に男を含めた他の客たちのテンションが一気に最高潮に高まる。

「うおおおおおおおおっし！ 聞いたか、みんな！ 聞いたな！ 僕は今から漢になる。先に声をかけた俺の勝ちだ！」

もはや何を言いたいのかもよくわからないのだが、それでも周りの人間はそのわけの分からない男のテンションに引っ張られて、やたら盛り上がりっていた。

そんな中、未だ冷静なレオーデが、

「いいのか？ あんな事言つしまつて。撤回するなら今のうちだぞ」
リオーネを心配して声をかけるが、リオーネその言葉に首を振つた。

た。

「いえ、大丈夫です。これでも私鍛えていますので」

男以外の客がテーブルを動かし、店内の中央にスペースを空ける。
そこにリオーネと男が移動し、対峙する。

「とりあえず、あんたに参ったと言わせればいいんだな。ルールはあるか？」

「特には。ああ、ただ気絶したら相手の負けという事でお願いします」

「ほ～。よほど自信があるみたいだな。ちなみに……」この争いの最中に俺の手がたまたまあなたの身体の大事な部分などに触れても事故つてことでいいよな。戦うんだから予期せず触れても仕方がないもんな！」

酔いが更に回っているのか、普段胸に秘めている男の欲望が一気に吹き出していた。「こまでいくともはや単なるセクハラである。そんな男に他の女は「うらやましいぞ、このやろおおおおお」とか「てめええええ、俺と代わりやがれ！」といった声も聞こえ、そんな男たちの様子にリオーネは苦笑いを浮かべるしかなかった。

「仕方ないですね。ですが、そんな事を女の私に言つ以上、必要以上に痛い目にあつても文句は言わないでくださいね」

その言葉を最後にリオーネと男は無言になる。緊張感からか、周りの雑音も次第に小さくなり、消えて行く。

そして、雑音が一切なくなつた瞬間、男が動き出した。

「つおおおおお。俺の春よ来いつ！」

勢い良くタックルをかまし、リオーネを押し倒しに行つた男。しかし、己の身体がリオーネにぶつかると思った瞬間、相手の姿は目の前から消えていた。

「……あれ？」

間の抜けた声を上げる男だったが、すぐさまその声は苦悶の声へと成り代わった。

一瞬の間に男の背後に回つたりオーネが、男にとつて最大の急所である金的に勢いよく右蹴りをかまし、激痛に悶える間もなく足を

絡めとり、男を床に倒すと腕を捻り取りそのまま押さえ込んだ。

「 ツツツ！」

激痛から声を上げて参ったと叫ぶ事もできない男は目には涙を浮かべて苦痛に耐えていた。一連の行為を見ていたギャラリーは男の様子を見て、今のがもし自分だったらという恐ろしい想像をし、顔から血の気が引いて行くのを感じていた。

そして、よつやく痛みの波が引いてきた男は、間髪容れずに声を上げた。

「まいった！ ごめんなさい、俺が悪かったです！」

今のは痛みで酔いが冷めた男は冷静になり、リオーネに謝り続けた。

「わかりました。私の勝ちですね」

男を離し、一瞥もせずカウンター席に戻つたりオーネ。男は一緒に飲みにきていた仲間に慰められ、自分が元いた席へと戻つて行つた。

「あんた中々やるな。腕もいいが、思い切りの良さもいい。男の急所をあれだけ思い切り蹴り上げる女を見たのは初めてだ」

出来上がったミートパイと蜂蜜酒を出しながら言つテオード。正直褒め言葉なのかどうなのかわからないので、リオーネはただ困った表情を浮かべるしかなかつた。

「いえ、私に戦い方を教えてくれた人が、男が相手の時は迷うこと

なく急所を狙えと叫んでいたもので

昔の話だと思つたが、リオーネは一瞬胸の奥が痛むのを感じた。

「へえ、あんたの師匠はよっぽどえげつない奴なんだな。おつと、自己紹介がまだだつたな。俺はこの酒場の店主のレオードだ。さつあんたに絡んできたような奴もいるが、ここは比較的雰囲気のいい場所だと思っている。よければこれからも使ってくれ」

血口紹介と一緒にさりげなく店の宣伝をするレオード。そんなレオードにリオーネは笑顔とともに、

「私はリオーネといいます。これからこの下町の警護をさせていただきますので、さつきのような人は私たちの仕事の成果になるのでむしろ歓迎です。この店も雰囲気がいいのは確かなので、これからも使わせてもらおうと思います」

血口紹介をする。

「リオーネって……まさか、あんた今度下町に派遣されるっていう騎士隊の副隊長さんか？」

予想だにしない名前に驚くレオード。しかし、そんな事を意に介わず、リオーネは淡々と答える。

「ええ。隊のメンバーはまだ来ていませんが、一足先に私だけこちらの下町にこさせさせていただきました。みなさん、これからよろしくお願いしますね」

リオーネの発言に場が静まり返る。そして、一瞬の静寂の後、酒

場からは驚愕の声が叫びあがつたのだった。

再会

アルがリオーネと会つた翌日、下町は例の騎士隊副隊長が既に訪れていた。という噂で集まつた人で溢れかえつていた。

事の発端は昨日のリオーネの行動によつて家に帰つた人々が、家族や知人にこのことを話したせいで噂が広まつたのである。噂はすぐ下町全域に駆け巡り、中には中階層から下町に訪れる人の姿も見られた。リオーネが宿泊している宿は大勢の人で取り囲まれ、我先にと姿を見ようとする見物客でいっぱいであつた。

そして、噂の張本人であるリオーネはどうと、

「これは困りました……。まだ隊の皆が到着していないのに、勝手に名乗つてしまつたのがマズかったようです」

自分の容姿についてあまり意識をしていないリオーネは、騎士隊にいたときから散々、部下たちに「副隊長はもつと自分の容姿について自覚してください！」と口酸つぱく言っていた。そして、その言いつけを守らなかつた結果がこれである。

リオーネは自分を目立たないようにするために、近くの露店で売つていた薄い生地のハンチングを買ひ、田元深くまで被り、顔が見えないようにした。

そして、昨日出会つた白髪赤眼の少女、アルに会つために約束をした場所に向かつていた。

（まだ時間はだいぶあります、遅れるよりはいいでしょう。時間が余つているようなら近くの露店や店の商品を見ていればいいだけのことですし……）

気が付けば少女との再会にビックリ心躍らせていて自分がいること

に気が付く。初対面だつたはずなのに、どこか懐かしい雰囲気がある少女からは漂っていた。性格も容姿も全然違うはずのアルに、リオーネは昔の自分を重ねていたのだ。

（私があの子くらいの歳の時は、ずいぶんとわがままでしたね。気が強くて、不平不満を周りに当たり散らして……。厚顔無恥もいいところでした）

下級といえど富裕層の家系に生まれたリオーネ。幼い頃はさんざん甘やかされ、厳しい現実を知らずに育つてきた。そのためか、プライドばかり無駄に高く、自分では何一つできないようなお嬢様としてすくすくと育つていった。

しかし、そんな日々も長くは続かず、事業に失敗したリオーネの父親は家から逃げ出し、母は心を病み衰弱して死に、家は没落し、リオーネも家に残った借金の肩代わりとして奴隸にされそうになつた。

（そういうえば、あの人にお会つたのも、ちょうどアルちゃんくらいの歳でしたっけ……）

思い出せば胸が痛み、心は黒く染まっていくといふのに、彼のことを思い返すのを止めることができない。激しい痛みの中にある、ほんのわずかな痺れるような甘さが忘れることを許さないのだ。

それは、彼、フィードの居場所が分かつてからより顕著になつていた。

（最初は反発ばかりしていて、ろくに私の言つことを効かない人の人を、私は下僕のように思つてましたね。周りから見たら実際は逆だったと思いますが）

思い返すのはフィードとリオーネが出会った最初の時。奴隸商に連れて行かれそうになつたリオーネは、プライドを投げ捨ててまでも「助けて！」と声高に叫び続けた。

しかし、周りの人間はそんなリオーネを一瞥するだけで、関わりたくないという意思だけ示し、傍観するのみだつた。

そんな状況にリオーネは絶望し、もう駄目だと諦めかけたときには声をかけたのがフィードだつた。

その時のリオーネよりも遙かに暗く、深い絶望を目に浮かべ、心が擦り切れそうな様子だったフィードは、

『自由に生きたいのか？』

とリオーネに問いかけ、

『自由に生きたい！』

と答えたリオーネを奴隸商と交渉して引き取つた。

今にしてみれば、当時家には相当な借金があつたため、それを全額支払い、リオーネを引き取つたフィードは相当金が消えたと思つ。そのあとも、リオーネの世話をし、剣を教え、魔術を磨かせ、知識を増やしことさまざまなことをリオーネに教えた。

そのおかげで、今のリオーネはあるといえるし、もしあの時にフィードが救いの手を差し伸べなかつたらと思うとリオーネはゾッとする。

だからこそ、リオーネは成長し、フィードの足を引っ張らず、自信を持つてパートナーだと言える様になつた頃に今まで自分が受けた恩義を自分の人生をかけてフィードに返そうと誓つたのだ。

フィードも何も言わずにリオーネを傍に置いていてくれたし、実力がついたころにはリオーネを信頼して背中を預けてくれるようになつた。

だから、これからもずっと彼の傍にい続けられるとリオーネは信じていたのだ。

あの日までは。

いつものよひに各地を旅し、フラン近郊まで来たとき、フィードはリオーネに告げた。

『リーネ、お前はこれから自分のために生きる。これ以上俺の傍で時間を無駄に過ごす必要はない。お前に一番合っているフラン騎士団に少しツテがあるから、お前のことを紹介しておいてやる。

なに、お前なら上手くやれるさ。それに、そつちで生きるほりがお前の性に合つてゐる』

あまりにも突然の宣告に、リオーネは一瞬フィードが何を言つているのか分からなかつた。お互に通じ合つてゐると思っていたのは、リオーネだけで、フィードはリオーネを必要としていなかつたのだ。

だが、その言葉に到底納得できないリオーネは当然フィードに反発し決闘を挑んだ。その結果敗北し、次に目が覚めたのは騎士団の医務室だった。そして、そこにフィードの姿はなかつた。

フィードとの戦いで傷ついた身体に鞭を打ち、無理を押して彼を探しに行こうとするリオーネだったが、一人の男性によつてそれは止められてしまった。

それが、リオーネの所属する騎士団の総隊長で、フラン騎士団第一隊隊長エルロイドだった。齡三十にも満たない彼は、若くして騎士団の総隊長にまで上り詰めた眞の天才としてフランに留まらず他国にまでその名が知られている。

『君が彼のことを探しに行くのは構わないが、一人では捜索するにも情報収集するにも限界があるとは思わないか？ どうせなら騎士団に入つて上を田指し、他国情報も手に入れて彼を見つけるほうが早いと、私は思つた。どうかね？』

そう言つて騎士団に勧誘するエルロイドの手をリオーネは即座に握り返した。その時のリオーネにとってファイードが見つけられるのなら、どんなものでも利用しようという考え方しか頭になかったのだ。

騎士団に入り、エルロイドの紹介といつともあり、リオーネに対する周りからの注目は多かつた。基本装備の鎧を着ないで戦場に出たり、依頼をこなすことを許され、それでいて騎士団でも数少ない女性騎士なのだ。注目されないほうがおかしい。

実際、始めのほうはいわれない誹謗や中傷、妬みや僻みの視線や言葉を数多くぶつけられていたリオーネだが、依頼をこなしてその実力を發揮していくうちに、周囲からそのような視線や言葉を投げかけられることはなくなつていき、代わりに羨望や親しみの態度をとる人々が彼女の周りに集まりだした。

それは、荒んでいたリオーネの心を少しずつ癒していき、騎士団に入つて半年も経つ頃には、リオーネにとって新しい居場所が騎士団にできていた。

一向に見つからないファイード。そして自分は捨てられたのでは？

という以前から思つていた考えを少しずつ受け入れるようになつたりオーネは、やがてファイードのことを忘れるように努めて、騎士団での新しい自分として生きようと思い、より一層周りの期待に応えるようになつていった。

普段から私服同然のリオーネは、そのままの格好で城下町を歩き、そこに住む住人たちと交流をし、困つたことがあれば彼女の手でできる範囲で解決してきた。

そのかいあって、彼女は騎士団に入つてハケ月が過ぎる頃には、騎士団のメンバーや住人から多大な信頼を受けることになり、異例の早さで空いていた九番隊の副隊長を就任することになった。

薬屋の前に辿りついたリオーネは立ち止まり、行き交う人波を一人眺める。まるで、そこに彼女が探している相手がふと現れるんじやないかと想像し……。

（まだ、ここにきて二日目です。そんなすぐに会えるわけないですよね。それに、あの人は私のことを避けてどこかへ行ってしまつてる可能性もありますし）

リオーネが来るということを知らないフィードではない。もしかしたらもう別の地域へ旅立つてしまつている可能性もある。そのことを考えなかつたりオーネではない。

（ですが、それでも。私はもう一度あの人に会いたいと思つているんです……。なぜ、私を捨てたのか、それを知りたい……）

実際に会つて、どんな反応を自分が起こすのか、予想も付かない。だが、けしていい反応を示すことはないリオーネは思つてゐる。それだけ、フィードがリオーネにしたことは残酷で非常なものだったのだ。

「リオーネさん！」

と、ふいにリオーネから少し離れた場所から、人波を搔き分けて自分の元へと向かつてくる小さな少女の姿が見えた。手にはバスケットを持ち、笑顔を浮かべ、駆けて来る。そう、アルが来たのだ。

その姿を見て、リオーネも自然と笑みを作り返す。

「ゆっくりでいいので、気をつけてきてください。転んだら痛いですよ」

そんなリオーネの心配する言葉にアルはますます笑顔になり、

「大丈夫ですよ。もうすぐそっちに行きますね」

と元気よく返事をし、勢いよくリオーネの元へと走ってきた。しかし、勢いをつけすぎたのか、最後の最後で止まり切れず、リオーネの胸元に飛び込む形でアルは到着した。

「あ、すみません。リオーネさん」

えへへと笑いながら少しも反省した様子がないアル。そんなアルにリオーネは仕方がないと苦笑する。

「そんなに急がなくても私は逃げないですよ。それよりもその手に持ったバスケットはどうしたんですか?」

アルが持っているバスケットを見て、リオーネは疑問を投げかける。

「これはですね、昨日のお礼にリオーネさんにクッキーを焼いてきたんです。上手にできたと思うので、よかつたら食べてもらえませんか?」

恥ずかしがりながらも持っていたバスケットを手渡すアル。そして、それを受け取つたりオーネは早速バスケットの蓋を開け、香ば

しき香りのするクッキーを一つ摘み、口の中へと放る。よく味わい、胃の中へとクッキーを入れたりオーネは、

「うん。とってもおいしいわ、これ。わざわざありがとうございましたね、アルちゃん」

アルに負けないくらいの笑顔でお礼を述べる。褒められたアルは、ふにやりと頬を緩ませて、

「はー！ 昨日は本当にありがとうございました！」

と昨日に引き続きお礼を述べた。楽しい気分に浸る一人。容姿は違えど、一人の戯れる様子は端から見ればまるで姉妹のようだった。

「それで、今日はアルちゃんは一人で来たの？」

何気なく質問するリオーネ。それにアルは先ほどからの元気のよさで答える。

「いいえ、今日はマスターと一緒に来てるんですけども……。マスターはリオーネさんの姿が見えたときによく『一人で手渡してきな。その方がきっとよろこんでくれるよ』って言つて、一緒に来てくれなかつたんですよ。たぶん今も近くにいると思うんですけど」

「へえ、近くにいるんだ。そのマスターっていうのがアルちゃんの保護者なの？」

「はい、そうです。このお礼のクッキーもマスターが提案してくれたんですよ」

「そうなんだ。私ちょっとアルちゃんのマスターに会つて見たいかな」

これだけ真っ直ぐな少女を育てられたのだから、よほどこい保護者なのだろう。気を使わせてしまったようなら悪いし、一度話もしてみたいと思つていたリオーネはアルにそう提案した。

「わかしました。それじゃあ、ちょっとマスターを呼んできますね」

そう言つて再び人波の中へと駆け込んだアルを見送り、リオーネはアルが持つてきてくれたクッキーに手を伸ばし、もう一つ口にする。

実際に甘く、慣れ親しんだ味のするクッキー。これだけのものを作ってくれたアルの姿を想像して、リオーネの頬もアルのように緩んだ。

しかし……。

（え、ちょっと待つて。なんでこの味、おかしい。だつてこれは……）

あまりにも慣れ親しんだその味。ここしばらくは口にしていなかつたそれに、リオーネの脳内が一気に刺激される。そして、この味をアルが知つているはずがないという考えが頭の中に浮かんでくる。なぜなら、これはリオーネがフィードと旅をしていくときに自ら考えて作つた味だったからだ。

動搖し、考えのまともらない、リオーネの耳に再びアルの声が聞こえた。この疑問についてアルに問い合わせよ。そう思つリオーネ

だつたが、答えは問い合わせる前に血ら田の前にやつてきた。

「よつ……久しぶりだな。リーネ」

懐かしい声と共に現れたのは一年前までずっと一緒に旅をしてきた青年。その容姿はまるで変わることなく、つい先ほどまでずっと一緒にいたと感じさせるほどだった。

あまりにも突然のことによりオーネの思考に行動が付いていかない。驚きのあまり、口をパクパクと開けることしかできないリオーネにアルが決定的な一言を告げる。

「リオーネさん！　この人が私のマスターのフイードです」

リオーネとフイードの間にできている微妙な空気に気が付くことなく、アルは一人嬉しそうに話を続ける。

いひして、一年の時を経てかつて旅を共にした二人は再会した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9695z/>

アルは今日も旅をする

2012年1月14日17時52分発行